平成二十八年度　第百十八回
京都大学書道部
展

日時　平成二十八年十二月十七日・十八日
十時～十七時
（十八日は受付十六時まで）

場所　建仁寺
来院・禅居庵

―巻頭に寄せて―

本書展名には京都大学のシンボルである「樟（クスノキ）」の字が入っています。クスノキは暖かい地域に生育する常緑の広葉樹で、キラキラと照りの強い葉をもつ大高木です。特徴は幹周二十メートルを超えることもある太い幹、枝分かれの多さ、ブロッコリーのようなもこもこした樹形でしょう。京都大学の時計台の前にも実際に見ることができますし、ジブリ映画『となりのトトロ』に登場するクスノキも印象的です。

さて、本書展はそんな大木の名を冠していますが、京都大学書道部も部員数１００名を超える大きな団体となっております。クスノキの大木が様々な方向に枝分かれをし、ほんの少しずつ枝を伸ばし太陽の光に向かって葉を広げる。そんなふうに私たちも京都大学書道部という歴史のある大きな幹を拠点に部員それぞれが自分の目指すところ、表現したいものに向かって練習を重ね作品制作に励んでおります。書道は１日でうまくなることはありませんし、なかなかすぐに思い通りにはいかないものです。悩み曲がりくねり部員同士刺激しあいながら成長しています。

今回もそんな中で生まれた個性豊かな作品が揃いました。作品数は多いですが、どれも各々の思いがこもった力作です。見飽きることのない、そんな書展になっていると思います。

この度無事に書展を開催できるのは、顧問の阿辻哲次先生や技術顧問の寺本蒼玄先生をはじめとした多くの方々のおかげです。この場を借りて心より御礼申し上げます。また阿辻先生は今年度が書道部の顧問として最後の年となります。今まで本当にありがとうございました。

最後になりますが、本日は厳しい寒さの中、第百十八回京都大学書道部冬樟展にお越しいただき誠にありがとうございます。どうぞごゆっくりとご覧ください。少しでもお楽しみいただければ幸いです。

平成二十八年十二月吉日

京都大学書道部　部長　小林由佳

誤字のあるお手本

阿辻　哲次（京都大学大学院　人間・環境学研究科　教授）

むかし子供が書道塾に通っていたころ、レベルごとのお手本と進級した個人名がずらっと並んだ「競書誌」が毎月送られてきた。そろばんやピアノなどでそんな雑誌が出ていることを聞いたことがないから、「競書誌」はまことにユニークな存在である。

ある時届いた雑誌に、お手本として「外受傅訓、入奉母儀」という八文字が書かれていた。これは『千字文』の一句で、「外では先生の訓えをうけ、家の中では母親の教えをうける」ということだが、ここに見える「傅」は今の日本ではほとんど使われない漢字だが「守り役」と訓じられ、要するに先生のことだ。その「傅」の右側は《甫》と《寸》からできている。ところが届いた雑誌のお手本では、《甫》の縦線が下に貫通しておらず、ちょうど「博」の右側と同じ形に書かれていた。明らかな誤字である。

おかしなことはほかにもあって、手本の文章についている解説では「傅」が「傳」となっていた。単なる誤植であればいいのだが、もしかしたら「傳」は「伝」の旧字体で、右側にあるのは「専」の旧字体で、「團」（団の旧字体）や「轉」（転の旧字体）などにも発音を表す要素として使われている。

だが戦後「専」の部分はさまざまな書かれ方をするようになった。「専」そのものは「専」となったが、「傳」と「轉」の右にあった《專》は《云》になり、「團」のなかにあったそれは《寸》となった。こんなに一貫性のない簡略化をおこなったのだから、ちょっとむずかしい漢字には誤字が書かれるのも当然なのかもしれない。

雑誌にはこの句の出典が明記されていないので、手本を書いた方がこの文章をいったいどこから取ってこられたかも不明である。しかし手本に堂々と誤字を書き、さらに解説でも誤りを重ねるのなら、いっそ手本をパソコンで打ちだしたらどうだい、と嫌みの一つもいたくなる。最近のパソコンなら行書だって隷書だって簡単に印刷できるし、それにパソコンならそもそも漢字を間違えることもないのだから。

年賀状を書こう

寺本 蒼玄（京都大学書道部 技術顧問）

最近の若者達は、携帯電話やパソコン等の普及にともない、年賀状を書いて出すというより、打って送るようになってきています。一つの文面を考えて打ち込めば、多人数の方々に一気に送れてしまうことから、一枚一枚書いて出す年賀状がだんだん面倒になり、書く人が少なくなってきているのが現状だと思います。

ただ、年賀状を出すということは、年頭の挨拶を交わすだけでなく、旧知の友人やお世話になった人、先輩、先生等年上の人達に挨拶と近況報告等を書いて、自分自身が元気で過ごしていること等を知らせることも兼ねています。

これを携帯電話やパソコン通信で打って出すことは、年上の相手に対して少し失礼になると思いませんか？　同級生や後輩ならばそれでも良いかもしれませんが……。

私は小学校の頃から年賀状を書いて出してきていますが、どんな下手な字であっても、心の籠った年賀状はうれしいものです。年齢と共に年賀状も一枚の作品として書いて楽しんで出しております。

君達も書を学んでいるのなら、筆で書いた年賀状を出してみてください。毎年、届くのが楽しみという人達が多くなってきてほしいものです。

臨書と創作

○臨書

過去の優れた筆跡を手本として書くことです。

臨書は段階や態度によって三種類に分けられます。最初のステップは、古典の字形や用筆に迫ろうとする、「形臨」と呼ばれるものです。形をまねることは、その古典に迫る最も近い方法です。

形がある程度まねられるようになってくると、次は古典に漂う雰囲気や運筆のリズムなど、形以外の要素に重点をおいてとらえようとする「意臨」の段階に進むことができます。このような、形以外の要素をとらえようとする態度は、真筆が歴史の中で失われ、模写したものや拓本しか残っていないような古典を臨書する際に求められることがあります。

古典をよく学んだうえで、書くときはそれを見ないで書く方法を「背臨」、臨書を重ねた後、臨書から学び取った古典の特徴や表現方法などを生かして、その古典とは別の字句を書くことを「倣書」といいます。この態度は創作につながるステップとなります。

書のあらゆる作品は、このような過去の作品から学ぶことを基盤としています。書道における基本と呼べるものが、臨書なのです。

○創作

自らの創意工夫による書の表現をいいます。

自分が伝えたいこと、表現したいことを明確にして、それに合った素材（語句や詩文）や表現方法を選び、試行錯誤しながら、自分の主張や個性が表れた作品になることを目指します。

臨書によって古典から得られる様々な表現方法を用いることで、作品に味わいや深みを出すことが出来るようになります。

○法帖

芸術作品として残された個人の書を、石や木に刻して拓本をとり、臨書や鑑賞に便利なように帖仕立てにしたものです。

今回の冬樟展では、各臨書作品の右横に臨書した箇所の法帖を掲示して、皆様にご覧いただけるようにしています。

作品鑑賞の参考に、こちらも是非ご覧ください。

書体について



『篆書』
漢字のもっとも古い形で、現在使われている漢字のもとになった字体です。秦朝に小篆として統一されたものが一般的です。均一な太さの線が特徴です。



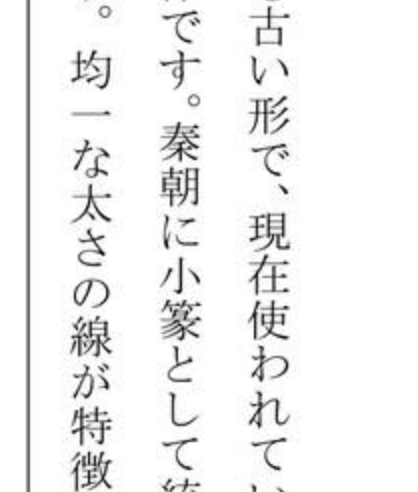
『隷書』
役人が複雑な字形だった篆書を早書きした際生まれた字体です。字形は横長で、時代が進むにつれ、線の終わりに独特な「波磔」がみられるようになります。



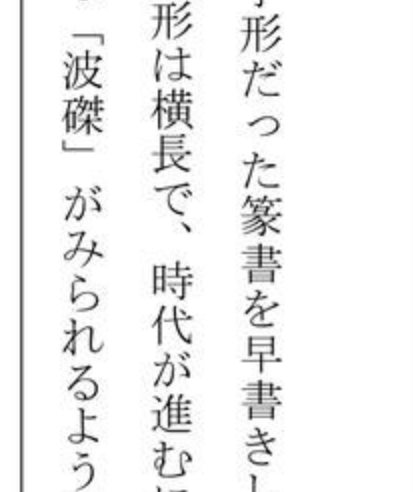
『楷書』
隷書からさらに記号化された、バランスの取れた字体です。その整った字形から、現在の漢字の基本とされています。



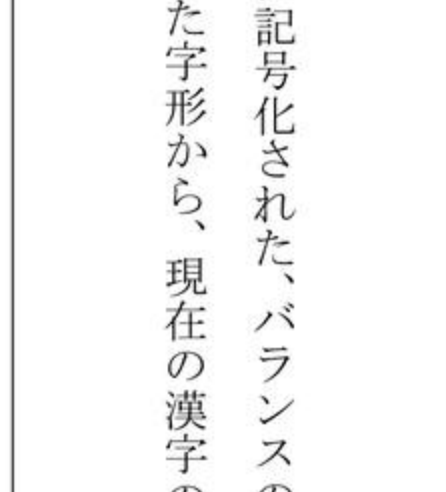
『行書』
隷書から発展した字体で、点画や線にしなやかさと変化がみられます。筆の速度や点画の流れが最も重視される書体といえます。



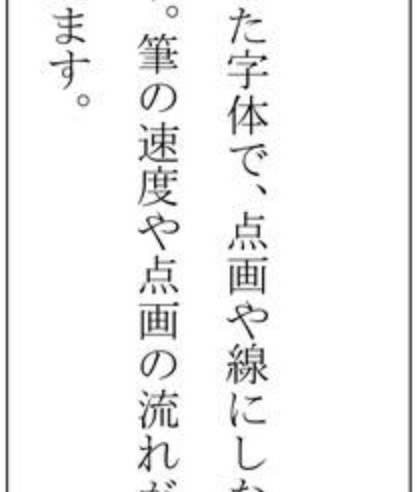
『草書』
隷書を早書きすることから発展しました。線の省略や筆順に変化があり、自由度の高い作品となります。文字から文字へと流れる「連綿」の美しさも魅力です。



『かな』
日本独特の表音文字です。草書の簡略化によって生まれました。漢字にはない流麗な筆致と同じ音を表す複数のかな、「変体仮名」による創意工夫が魅力です。



『調和体』
日本語の近代詩文や現代詩などを題材に、誰にでも親しみやすい書体で書いたものです。漢字かな交じりという日本語独自の特徴を生かした作品形態です。



『甲骨文』
亀甲・獣骨に刻まれた中国古代の文字です。これは最古の漢字の形であり、古代に行われた占卜の記録を刻したものです。

書家説明集

文責：原誠人

紙幅の都合上、(中国)書史上特に重要とされる書家五人に絞ってごく簡略ながらご紹介致します。

王羲之(おう・ぎし)　～究極の規範・永遠の書聖～

楷・行・草の各書体を整理完成させた。枯淡な気品で知られる楷書**『楽毅論』**(臨：吉村)、書史上最高傑作の一つである行書**『蘭亭叙』**(臨：金岡)などが代表作で、その格調の高さから中国では古くより「書聖」と仰がれる。それは唐代に僧懐仁(えにん)が二十余年かけて羲之の字を継ぎはぎした**『集字聖教序』**(臨：挟間)をまとめ上げたことからもうかがえる。芸術としての「書」の真の歴史は王羲之から始まったのである。

王献之(おう・けんし)　～父と双璧を成す「媚趣」の書家～

羲之の第七子。古来、父と併せて「二王」と尊重される。幼少時、献之が筆を握っていたのを羲之が引き抜こうとしたところ抜けなかったので、大成を確信したという。その書風は父を受け継ぎつつも独自の色彩をもち、伸びやかで理知的な雰囲気が存分に発揮された楷書**『洛神賦十三行』**、羲之には見られない二字以上の続け書きを含む草書(連綿草)の尺牘(手紙)**『中秋帖』**(臨：橘)などが代表作である。

●その他の臨書作品：片野『衛軍帖』、郡『節過歳終帖』(参考：小林『臨王献之省前書帖』(王鐸書))

欧陽詢(おうよう・じゅん)　～書史を二分する「極則」の完成者～

始め隋の煬帝(ようだい)、次いで唐の太宗(たいそう)に仕えた。容貌が重視される宮廷にあって「白猿の子」という伝説が残るような醜男だったとされるが、その書ゆえに出世した。詢と言えば楷書**『九成宮醴泉銘』**(臨：角谷)が有名である。凛然たる厳しさと品の溢れる温かみが絶妙に両立された荘厳な作であり、「楷法の極則」(=楷書の究極)とも呼ばれる。ここに文字の歴史は一つの頂点を迎え、同時に表現の可能性が開けた。

●その他の臨書作品：吉村『魏晋唐小楷集』のうち『般若心経』

褚遂良(ちょ・すいりょう)　～「遂良がいれば大丈夫！」～

自らも書名高い太宗が「虞世南(ぐ・せいなん)の死後、書を論ずるものがない」と嘆いていたところ、臣下の一人が「褚遂良がおります。王羲之の筆法を得ています」と推して臣下となった。代表作**『雁塔聖教序』**(臨：野田)は反り・たわみを具えた麗しく艶のある線質が特徴の楷書で、これを「極則」と呼ぶ向きもある。

●その他の臨書作品：堀場『楷書千字文』、吉岡『孟法師碑』

黄庭堅(こう・ていけん)　～覇気に溢れる絶後の書人～

同時代の書家蘇軾(そ・しょく)の弟子・友人・ライバル。覇気の横溢と不均衡の美が彼の大きな特徴であり、三十代の**『蘇軾黄州寒食詩巻跋』**(臨：浦川)や五十代の**『松風閣詩巻』**(臨：コリー)は京大書道部でも毎年のように臨書される。晩年は弾圧と流罪の不遇な政治人生であったが、制作面では草書三昧の境地に入り、**『李太白憶旧遊詩巻』**(臨：小野)に至っては「当時における世界最高の芸術」とする論者もいる。

参考文献：鈴木翠軒・伊藤参州(1996)『新説和漢書道史』日本習字普及協会
石川九楊・加藤堆繋(2004)『書家 101』新書館
『王羲之から王鐸まで 中国書道史の 10 人』(季刊墨スペシャル 1996 年夏号)芸術新聞社

作品一覧

技術顧問

寺本蒼玄　創作・『學道則愛人』……10
創作・『無欲速』……10

一回生

覚道直治　臨書・虞世南『孔子廟堂碑』……31
勝野初紀　臨書・羅振玉『甲骨文』……20
金岡杏祐　臨書・王羲之『蘭亭叙』……31
佐山侑莉　臨書・呉昌碩『元遺山七言行書對聯』……34
建部壮一郎　臨書・作者不詳『曹全碑』……35
中村勇真　臨書・鄧石如『詩経抑編』……24
野田智子　臨書・褚遂良『雁塔聖教序』……24
挾間優美　臨書・王羲之『集字聖教序』……36
一二暉生　臨書・作者不詳『史晨後碑』……37
平井達也　創作・『百龍図』……25
村上友梨　臨書・虞世南『孔子廟堂碑』……26
吉岡智志　臨書・褚遂良『孟法師碑』……40

二回生

阿部朱夏　臨書・宋徽宗『夏日詩帖』……18
今村朱里　創作・『漢崔子玉座右銘』……30
上村香鈴　臨書・文徴明『行書詩巻』……19
浦川真由子　臨書・呉昌碩『臨石鼓文四屏』……18
小野日菜乃　臨書・黄庭堅『蘇軾黄州寒食詩巻跋』……19
神﨑七海　臨書・黄庭堅『李太白憶旧遊詩巻』……31
臨書・作者不詳『居延漢簡』……20

郡健一郎　臨書・王献之『節過歳終帖』……32
小林由佳　臨書・王鐸『臨王獻之省前書帖』……13
米田景　創作・太安万侶『古事記』……21
阪井田有紗　臨書・三條實美『醉古堂劍掃語』……14
佐武千寛　臨書・文徴明『行書詩巻』……33
角裕介　臨書・王鐸『草書七律五首巻』……23
橘大輝　臨書・王献之『中秋帖』……24
徳田寛生　臨書・藤原定信『糟色紙』……25
仲村康太郎　創作・『賢賢易色』……24
臨書・張瑞圖『飲中八仙歌』……35

三回生

中村直樹　臨書・伝紀貫之『高野切第一種』……36
橋詰都　臨書・鄧石如『朱韓山座右編』……36
原誠人　創作・『壺中天』……37
原田拓実　創作・『百人一首』……25
平野晶子　臨書・作者不詳『曹全碑』……37
前山隼人　創作・『雲從龍風從虎』……37

大池らら　臨書・作者不詳『信貴山縁起絵巻』……20
岡本晴香　創作・『春が来る前に』……11
木下有羽　臨書・文徴明『五言律詩幅　―南棲傷春詩―』……12
小森千裕　臨書・伝藤原行成『粘葉本和漢朗詠集』……32
創作・『冬の訪れ』……21
創作・『百人一首』……33
クロッカー・コリー　臨書・黄庭堅『松風閣詩巻』……32
清水麻友美　臨書・何紹基『行草山谷題跋語四屏』……34
下坂桃代　臨書・『一字蓮台法華経』……22
堀場菜摘　臨書・褚遂良『楷書千字文』……38

頁番号

三村祐貴子　創作・『大夢』……15
宮部大志　臨書・顔真卿『多宝塔碑』……38
矢野凱己　創作・『従軍行』……16
山口和樹　創作・『美しき天然』……39
　　臨書・傅山『圓相寫魚五言詩軸』……16
　　臨書・趙之謙『行書七言聯』……26
　　臨書・趙之謙『急就篇』……39
山科直也　創作・『Starrrrrr』……17
山崎夏野　臨書・李邕『李思訓碑』……39
渡辺顕　臨書・作者不詳『前赤壁賦』……40

四回生

新井一矢　臨書・趙之謙『篆書五言聯』……18
荒巻拓哉　創作・『李白詩』……11
上西隆太　臨書・孫枝秀『篆書百體千文』……19
　　創作・『過天門街』……30
上井晴仁　臨書・米芾『苕溪詩巻』……30
闇姝恒　創作・『旅立ちの日に』……30
角谷遊野　臨書・欧陽詢『九成宮醴泉銘』……12
釜阪紘平　創作・『捲土重来』……20
藏岡凌平　創作・『使清夷軍入居庸』……13
小山佳哲　臨書・勝海舟『六然訓』……22
篠原理那　創作・『送友人』……22
島津七明　創作・『夢』……21
　　創作・『夢を叶える秘訣』……34
白谷暢浩　創作・『糸』……35
宗哲仁　臨書・張瑞圖『獨坐敬亭山』……23
疋田研一郎　創作・『お札・極』……15
吉村友希　臨書・鐘繇／王羲之／欧陽詢『魏晋唐小楷集』……27

修士一回生

片野裕太　臨書・王献之『衛軍帖』……15
石博昭　創作・『葛生』……16
家倉凌　創作・『文是瓦礫』……39
　　創作・『人の一生は重荷を負うて遠き道を行くが如し』……38

修士二回生

小松聡子　創作・『吉祥』……14
　　臨書・小野道風『智証大師諡号勅書』……33

博士課程修了

藤井基弘　創作・『少年老いやすく』……25

合作

金山優作／前山隼人　創作・『冬の凛然』……40
郡健一郎／山科直也／一二暉生　臨書・小野鷲堂『三體千字文』……28
矢野凱己／小松聡子／木下有羽／橋詰都　創作・『四神』……27
伊東優治／上西隆太／疋田研一郎／原誠人／中村勇真　創作・『理学部合作　―数式は理学の共通語―』……29
平井達也／中村勇真／橘大輝／勝野初紀　臨書・鄧石如『正草篆隷墨寶冊　四體帖』……41
全体合作　『書道部みくじ』……29
四回生合作　『一期一会』……29
二回生合作　『二回生かるた』……29

作品紹介

賛助作品

技術顧問　寺本蒼玄　先生

○西来院作品



『學道則愛人』　呉儼

「人の道を学べば、人を愛するようになる。」

一気呵成にゆったりとした川の流れの如く書き上げました。

○禅居庵作品



『無欲速』　論語

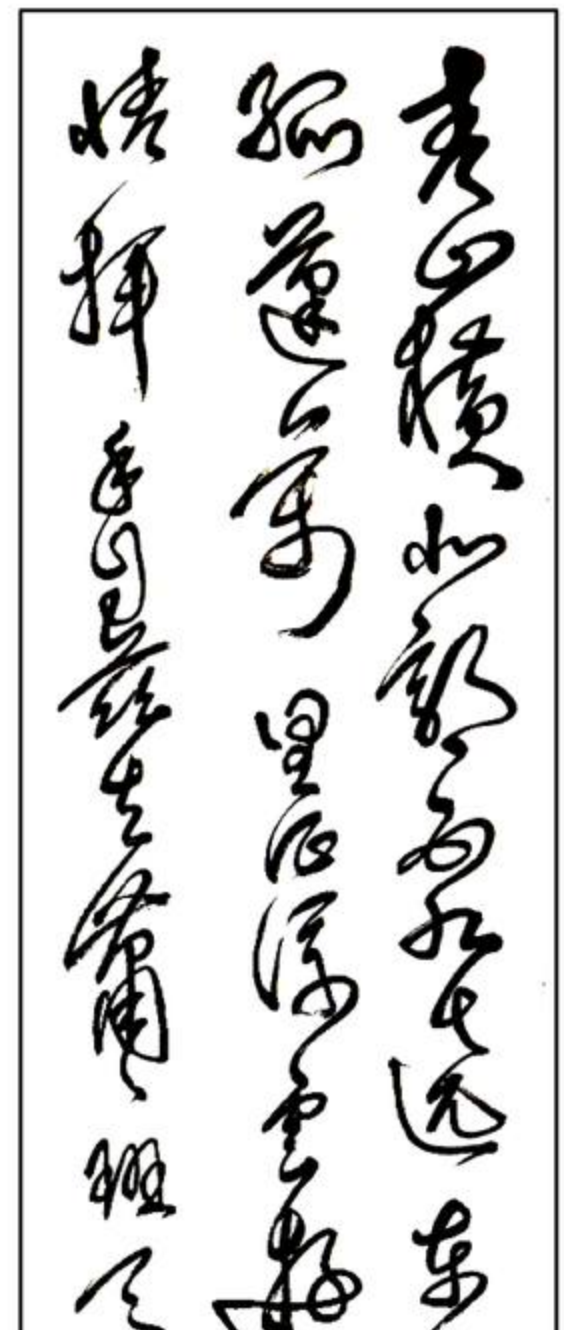
「事は、いたづらに急いではならない。」

行草書は運筆を速くしがちだが、筆脈の流れを止めない限り速く書かなくても書くことができる。

○西来院

1

荒巻拓哉　四回生
創作　草書　『李白詩』　二尺×八尺



「青山横北郭白水遶東城此地一為別孤蓬萬里征浮雲遊子意落日故人情手揮自茲去蕭蕭班馬鳴」

学部生としては最後の書展ということで、今まで臨書した王鐸の草書を元に創作しました。臨書なら法帖が道標でしたが、今回は暗闇の中を手探りするようで、先生や他の部員のアドバイスのみが頼りでした。軌道修正を繰り返しながらも進み続けたつもりですが、一体どこまで進めたのでしょうか。

2

岡本晴香　三回生
創作　近代詩文書　『春が来る前に』　二尺×六尺



「ありがとう君に逢えたそれだけで……（略）」

今回もゴールデンボンバーの歌詞を題材に選び、線の強弱と行の揺れに特に注意して書きました。私にとって書道はかけがえのない大切なものです。心を込めて、執念を持って、プライドをかけて…。ずっと尊敬してきた人への思いをぶつけて書き上げました。

3

角谷遊野　四回生
臨書　楷書　欧陽詢『九成宮醴泉銘』　二尺×八尺

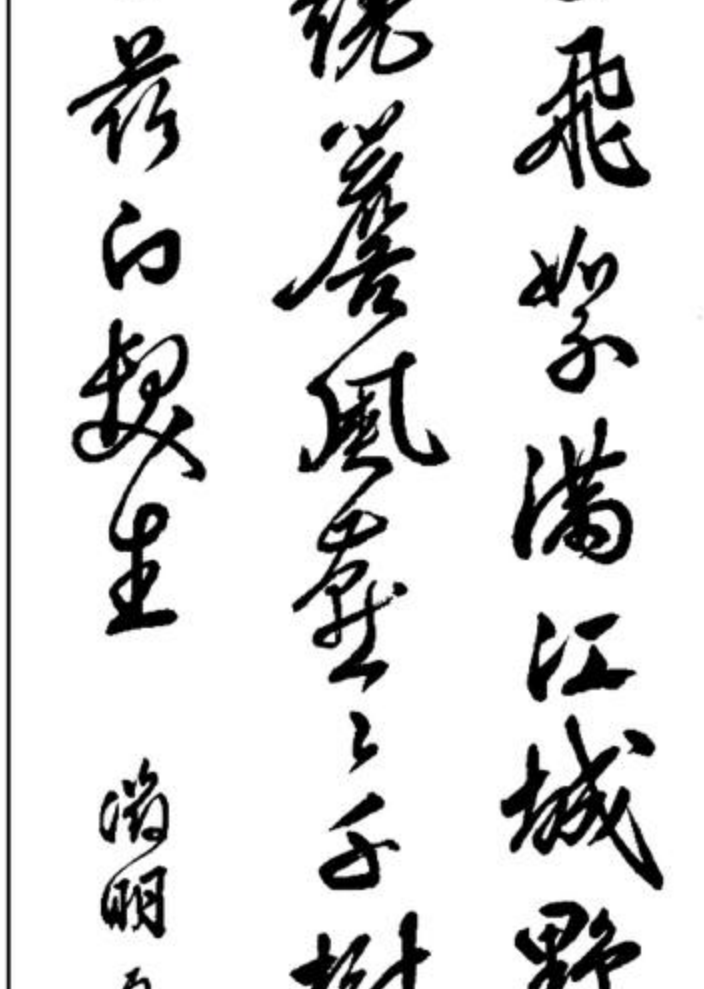
「九成宮醴泉銘秘書監検校侍中鉅……（略）」
九成宮の臨書は二度目です。硬くなりすぎず、しなやかな字を目指しました。何度書いても決して完璧には書けず、飽きることもありません。



4

木下有羽　三回生
臨書　行書　文徴明『五言律詩幅　―南棲傷春詩―』　二尺×八尺

「南棲三月盡、飛絮滿江城。野色疥烟中斷、斜陽雨外明。繞簷風燕〻、千樹煖鶯〻。歳有傷春感、兼茲白髪生。徴明。」
好きな書家の一人、文徴明の二八作品を臨書しました。伸びやかで躍動感のある線質と全体的に白の効いたすっきりとした印象が表現できていれば嬉しいです。



5

藏岡凌平　四回生
創作　隷書・行書　『使清夷軍入居庸』　三尺×六尺

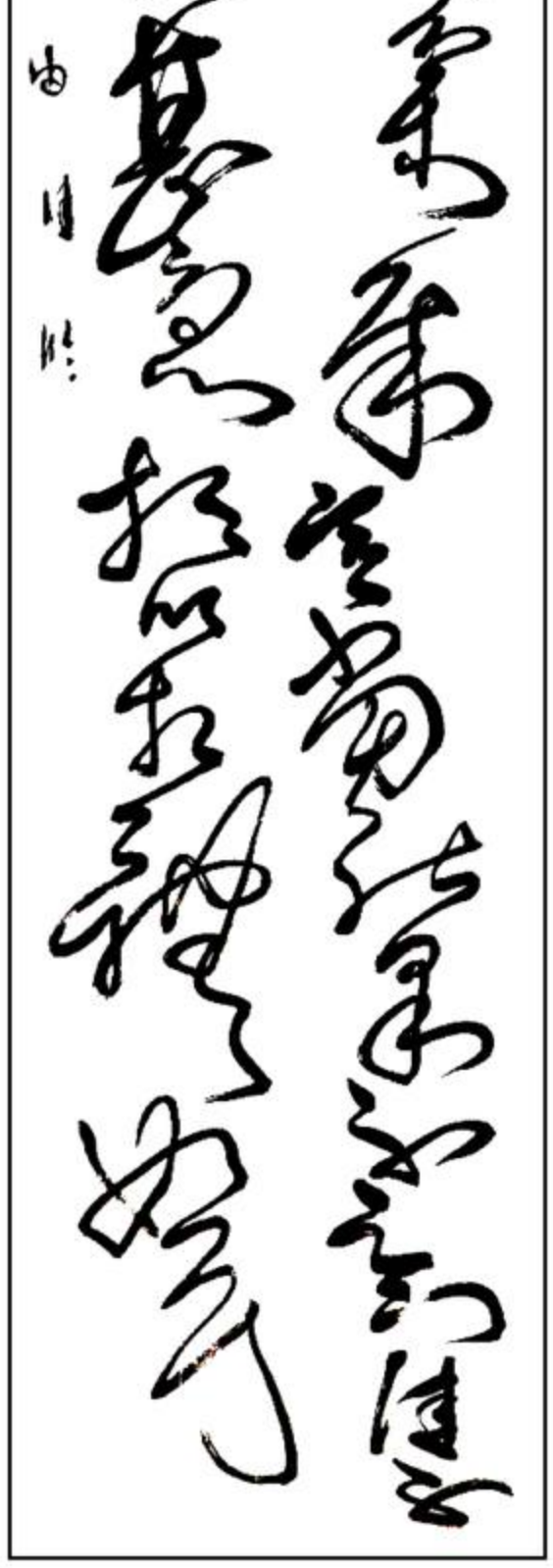


「使清夷軍入居庸　匹馬行將夕征途去轉難不知邊地別秖銭客衣単溪冷泉聲苦山空木葉乾莫言關塞極雨雪猶漫漫」

「旅の道のりは酷しそうだ…なめてた…だけど進む他無い」というのが大雑把な内容の高適の詩です。昨年度までとは異なるキャンパスで研究の世界に放り投げられた自分を重ね合わせながら書きたくなりました。一年ぶりの出品が卒業制作となり何とも寂しいものですが、書道を楽しめる環境に感謝の気持ちで一杯です。

6

小林由佳　二回生
臨書　草書　王鐸『臨王獻之省前書帖』　二尺×八尺



「省前書故有集聚意。當能果不。足下佳。不聞逼遺足下甚急。想以相體恕耳。」

王鐸がこれを臨書した時は原本を見ながら手もとの筆を見ないで連綿したのではないかと言われています。今回私は、右へ左へ自由に動く行や思い切りよく横へ広がる字の面白さの表現を目指しました。ご批評よろしくお願いいたします。

7

小松聡子　修士二回生
創作　篆書　『吉祥』　二尺×四尺

「吉祥」
部室にあるでっかい筆を一度使ってから卒業したい！　と思って書きました。お正月も近いのでおめでたい言葉を選んでいます。作品を見てくださった方にとって幸せな一年になりますように。



8

阪井田有紗　二回生
臨書　行書　三條實美『醉古堂劍掃語』　二尺×六尺

「澹泊之守。須從穠艷場中試來。鎮定之操。還向紛紜境上勘過。明治十一年春日　實美」
醉古堂劍掃は、儒仏道の古典から抜粋された中国の読書録で、法帖は明治時代の日本の政治家 三條實美が書いたものです。堅いような柔らかいような、でも筋があるような、不思議な書だなあと感じつつ、難しくもありますが楽しく書いています。



9

疋田研一郎　四回生
創作　行書　『お札・極』
二尺×八尺

「暖草如積山晴花更繁横水高下數家村靜憩牛荒尋犬来向鳥倦飛而知還碧山長茅暮雲愁靜聲不聞雷之聽為季婦説疑是武陵源儒生好奇古出口談唐生儀皇前所何人既死古道存遺書語不能萬巻徒空虚我願飲酒不復知其君看酔郷人存天」

視覚的な快感を得られるように意識して書いています。



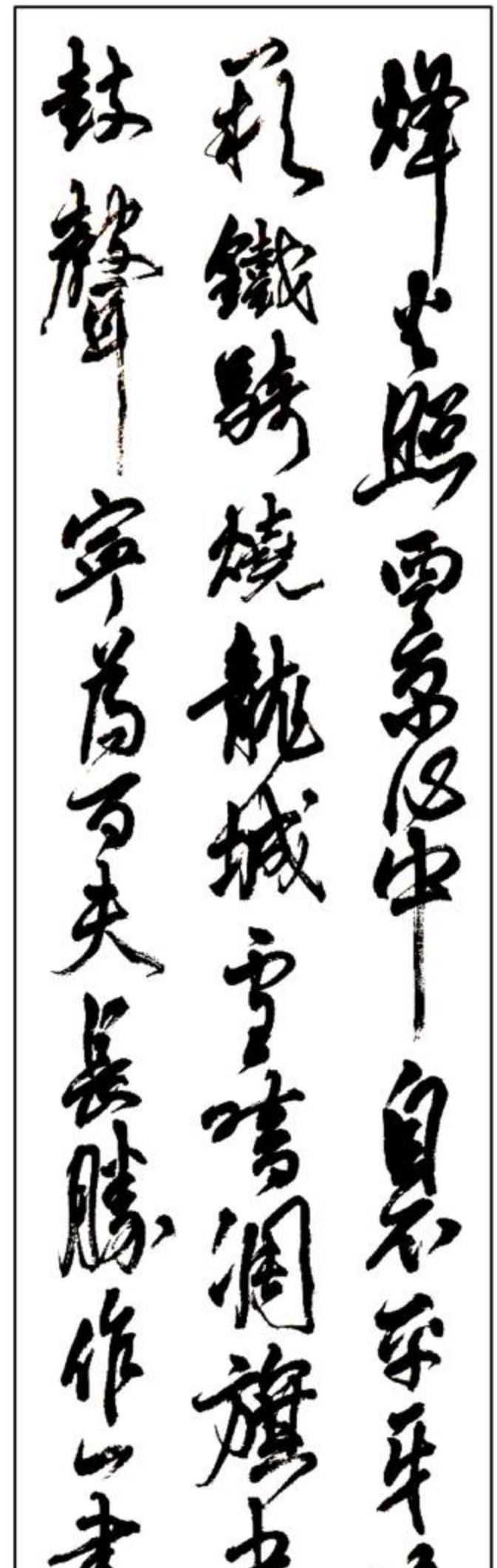
10

三村祐貴子　三回生
創作　行書　『大夢』　二尺×八尺

「處世若大夢胡爲勞其生所以終日醉頽然臥前楹覺來眄庭前一鳥花間鳴借問此何時春風語流鶯感之欲歎息對酒還自傾」

「二八の三行しか書けないんじゃなくて、書かないの！」…とは口が裂けても言えませんが、ずっと書いているこの形式が一番好きです。以前より少しでも進歩していれば、嬉しく思います。





11

矢野凱己　三回生
創作　行草書　『従軍行』　二尺×八尺

「烽火照西京心中自不平牙璋辞鳳闕鐵騎焼龍城雪暗凋旗畫風多雑鼓聲寧為百夫長勝作一書生」

書道をしていて一度はやってみたかった二八行草三行の作品。多画数文字の多さに悩まされながらも、試行錯誤を繰り返し何とかまとめ上げられたかな、と。普段書くことのない行草は楽しくもあり難しく、改めて書道の奥深さを感じた制作期間でした。



12

山口和樹　三回生
臨書　草書　傅山『圓相寫魚五言詩軸』　二尺×八尺

「圓相寫魚字何如寫龍字龍字敢逆鱗抹魚撥卻剌」

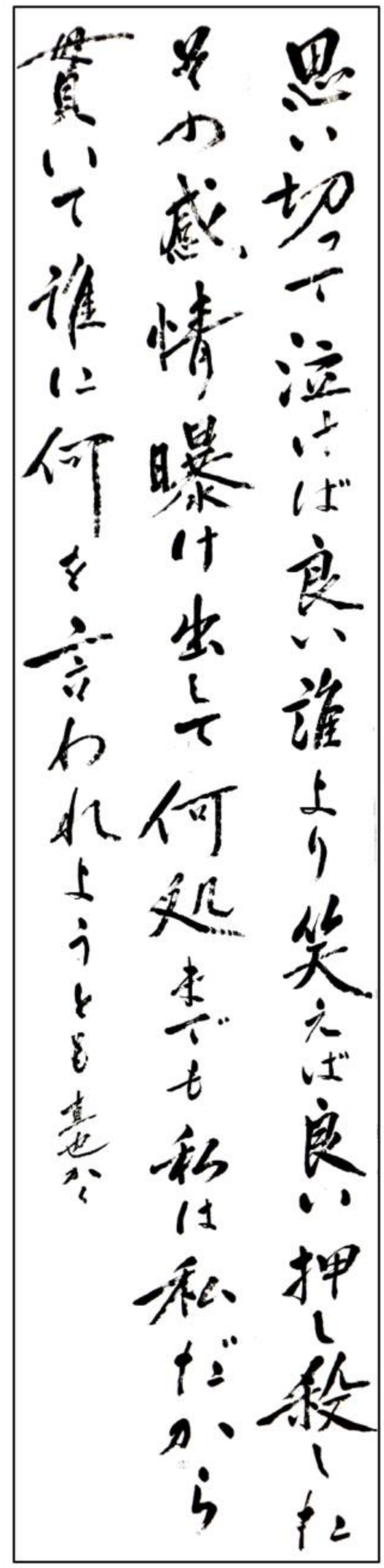
趙之謙の次に好きな書家は傅山ニキ。

13

山科直也　三回生

創作　調和体　『Starrrrrrr』　二尺×八尺

「思い切って泣けば良い誰より笑えば良い押し殺したその感情曝け出して何処までも私は私だから買いて誰に何を言われようとも」[Alexandros]のStarrrrrrr の歌詞より引用した作品。最近の作品を書くときのモットーは等身大の自分を楽しく表現することです。



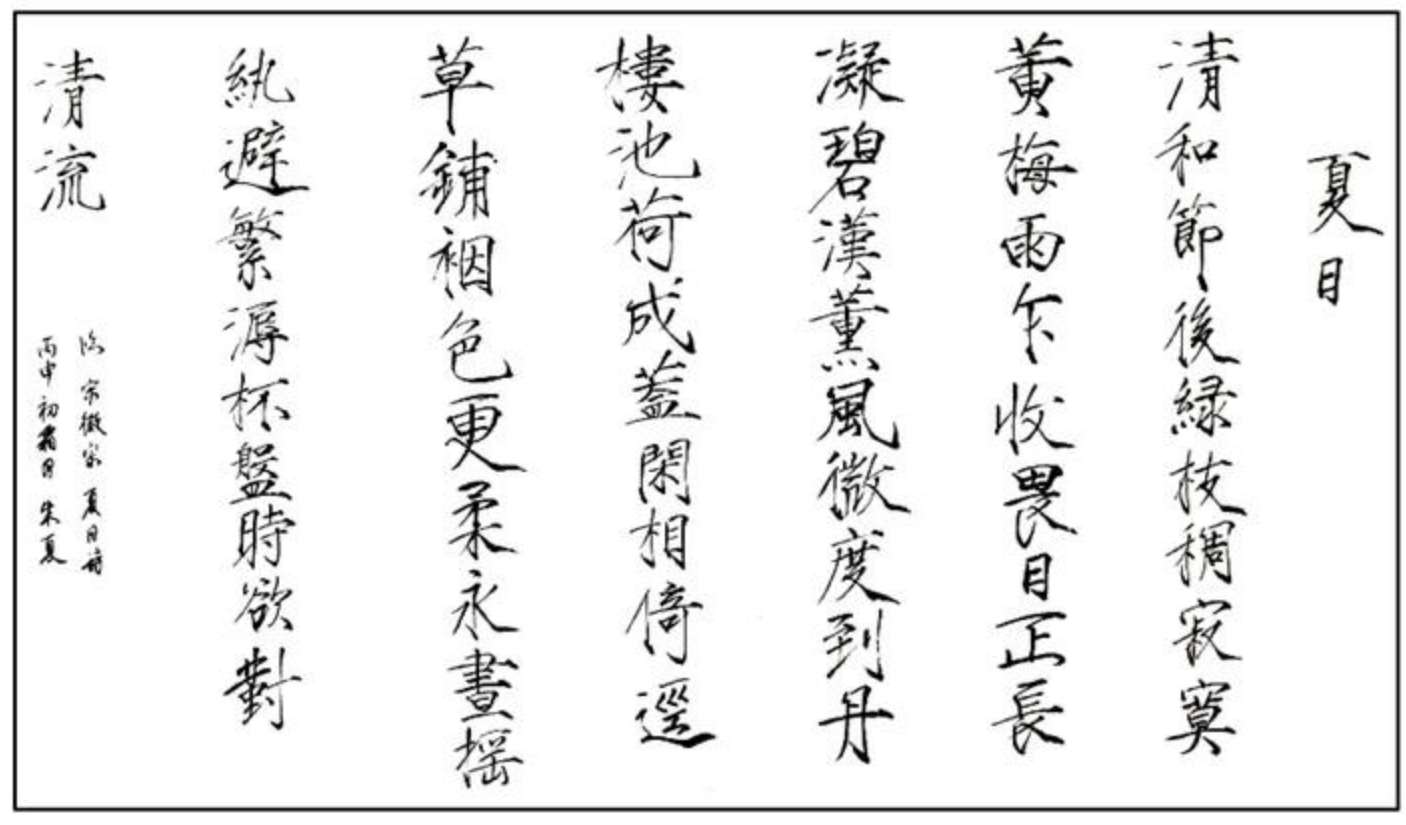
14

阿部朱夏　二回生

臨書　楷書　宋徽宗『夏日詩帖』　半切横三分の一

「夏日　清和節後緑枝稠寂寞黄梅雨乍収畏日正長凝碧漢薫風微度到丹樓池荷成蓋閑相倚逶迤草鋪裀色更柔永晝紈避繁溽杯盤時欲對清流」

好奇心を満たすために臨書しました。自分が好きでこれまでしてきた隷書とは遥かに異なった筆使いで、とても楽しかったです。



15

新井一矢　四回生

臨書　篆書　趙之謙『篆書五言聯』　半切　二連

「通経日有富　作善心無休」

四年間、ブランクがありながらも触れ続けた篆書。普段は多字数でちまちまと書いていますが、今回は気分を変えて大きく。書の内容とは関係ありませんが、ひとつの区切りと新たな始まりの意味を込めて…



16

上村香鈴　二回生

臨書　篆書　呉昌碩『臨石鼓文四屏』　半切

「田車孔安簋勒既簡左驂旛々右驂騏々〇呂〇于〇〇戎之〇」

二行目に馬編の漢字が三回登場し、そのうち二回は同じ漢字であるため、余計なことを考えながら書道をしていると書いているところがわからなくなり、字をとばしてしまうという失敗を何度かしてしまいました。書道をする際には余計な雑念は取り払うべきであるということを学ぶのにふさわしい法帖でした。



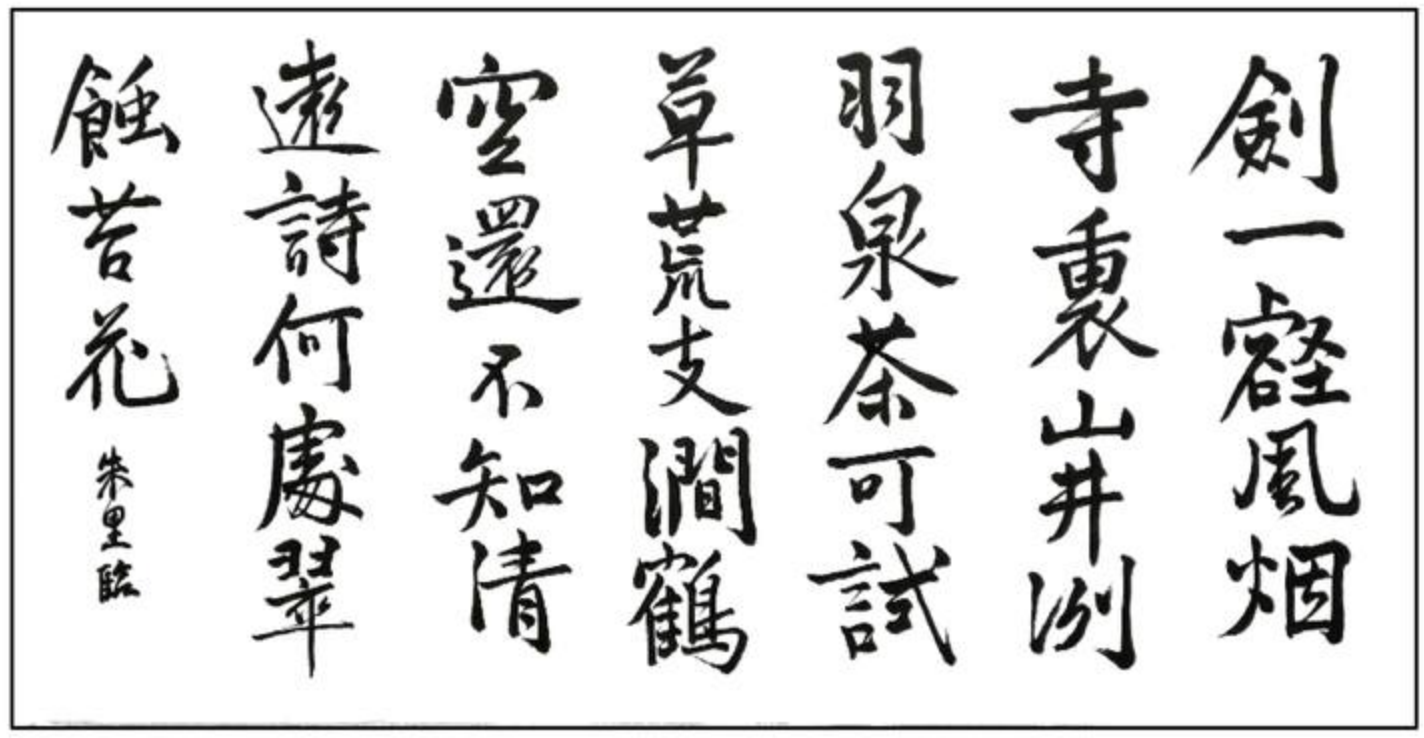
17

今村朱里　二回生

臨書　行書　文徴明『行書詩巻』　全紙横

「剣一壑風煙寺裏山井冽羽泉茶可試草荒……蝕苔花細雨斑」

私も一応女性なので、女性らしい流麗で爽やかな文字も書いてみたいと思い、最も流麗に見えた文徴明を臨書しました。書いてみた感想としましては・・・まだまだ私は女性になれそうにありません。



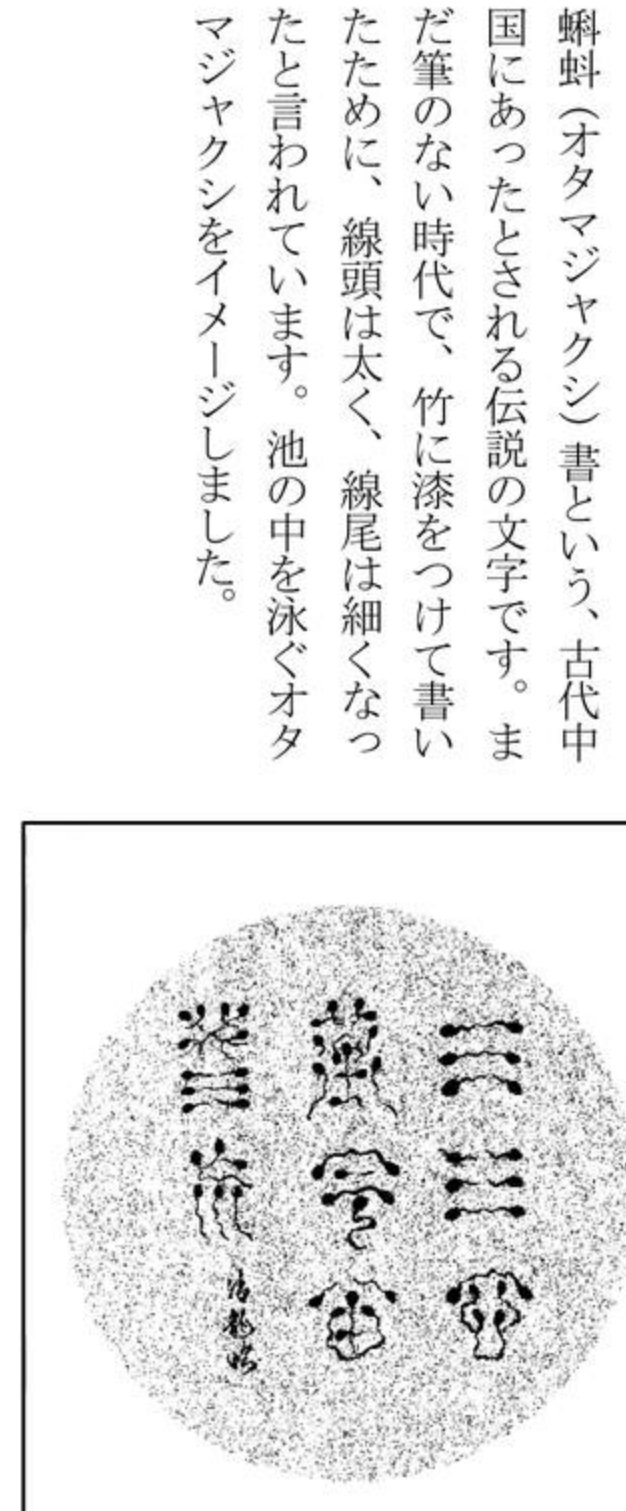
18

上西隆太　四回生

臨書　篆書　孫枝秀『篆書百體千文』　色紙

「天地玄黄宇宙洪荒」

蝌蚪（オタマジャクシ）書という、古代中国にあったとされる伝説の文字です。まだ筆のない時代で、竹に漆をつけて書いたために、線頭は太く、線尾は細くなったと言われています。池の中を泳ぐオタマジャクシをイメージしました。



19

浦川真由子　二回生

臨書　行書　黄庭堅『蘇軾黄州寒食詩巻跋』　半切

「猶恐太白有未到處」

堂々とした字が好きなので、また黄庭堅を選びました。それでも、似たものを書くのはつまらないと思い、いつもと違う構成に挑戦してみました。



20

大池らら　三回生

臨書　漢字仮名交じり　作者不詳『信貴山縁起絵巻』　巻子

「行きて見るに、聖（ひじり）のさま、いと尊くてあり……（略）」

今年の初めから製作を始めて、自分で裏打ちから表具まで行いました。とても時間をかけて作った作品になります。書き始めの字が気に入ってこの部分を選びました。巻物なので左から右への流れが読みやすいようにと意識しながら書きました。

NO IMAGE

21

勝野初紀　一回生

臨書　甲骨文　羅振玉『甲骨文』　聯落

「丁巳卜其〇干河牢沈嬖王亥貞沓干東母三牛己未卜其剛羊十干西南……（略）」

甲骨文字は、現在確認できる最古の漢字だそうです。今回はそんな甲骨文字を使った甲骨文（亀甲獣骨文字）を臨書しました。可愛さのあまり選んだこの作品。しかしなかなか手強かったです。一つ一つの漢字のつくりには意味があり、漢字の原点を垣間見ることができました。漢字が、書道が、ますます好きになりました。



22

釜阪紘平　四回生

創作　行書　『捲土重来』　半切

「捲土重来」

今年から本格的に研究が始まり、慣れないことも多く、時には他人と意見が対立することもあります。しかし、その逆境をはねのけ人と社会に意義深い研究を行うという誓いを込めてこの文字を書きました。これから殻を破って行こうとする愛すべき卵茸とともに。



23

神﨑七海　二回生

臨書　木簡　作者不詳『居延漢簡』　半切

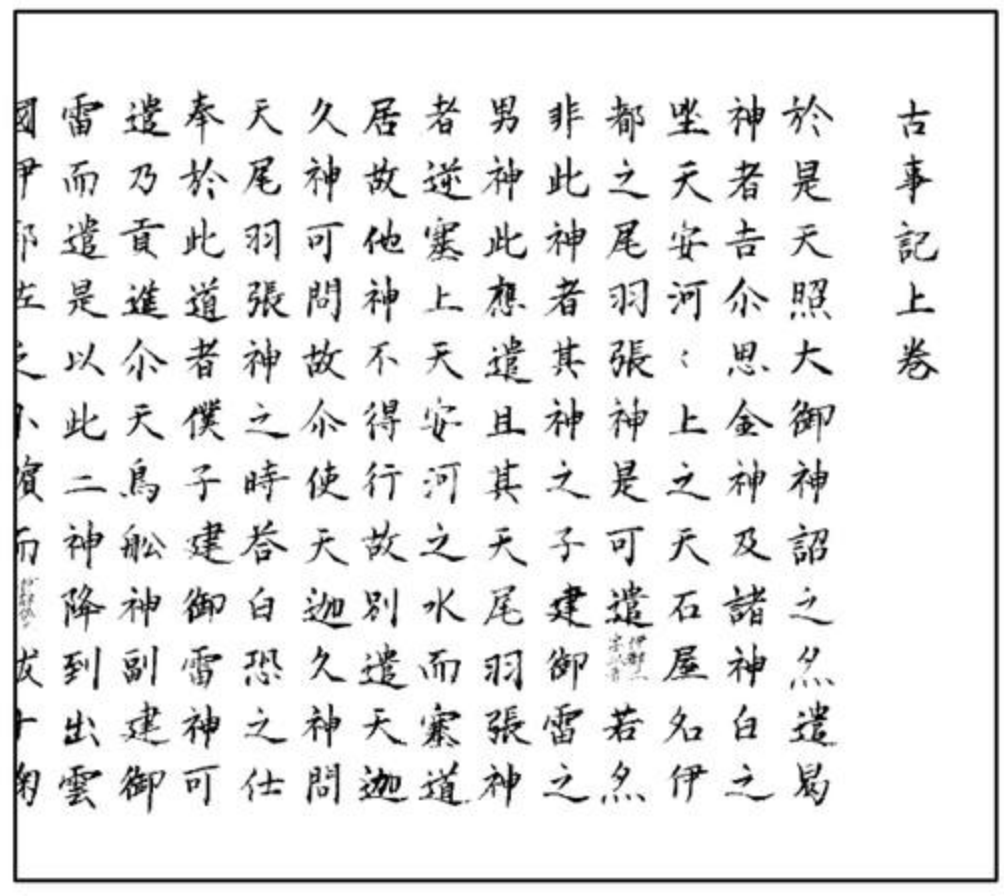
「肩水候所以私印行事敢言之都尉」

初めて木簡の臨書に挑戦してみました。羊毛特有の線を活かした作品になるよう努力しました。筆の赴くまま勢いに任せて自由に楽しく書いています。



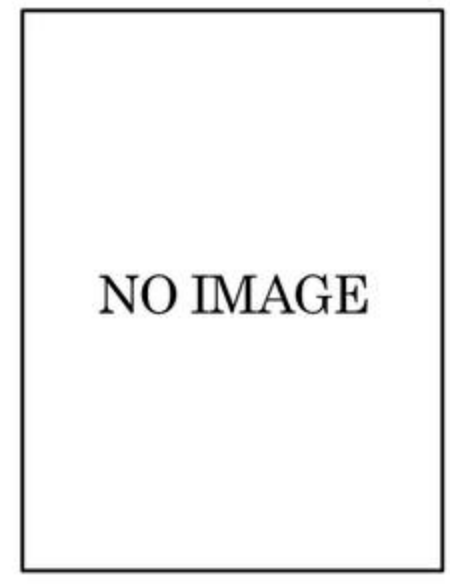
24　米田景　二回生
創作　楷書　太安万侶『古事記』　巻子

「於是天照大御神詔之……（略）」
今回選んだ題材は、日本最古の歴史書である『古事記』の中の『国譲り』神話。ここには出雲大社の成り立ちが記されています。九月の最後に出雲大社を訪れましたが、二千五百年以上も経てもなお、その伝統が受け継がれていることに感動しました。皆さんも是非訪れてはいかがでしょうか。ご批評もよろしくお願いします。


古事記上巻
於是天照大御神詔之忽遣
神者吉尒思金神及諸神白之
坐天安河上之天石屋名伊
都之尾羽張神是可遣若忽
非此神者其神之子建御雷之
男神此應遣且其天尾羽張神
者逆塞上天安河之水而塞道
居故他神不得行故別遣天迦
久神可問故尒使天迦久神問
天尾羽張神之時荅白恐之仕
奉於此道者僕子建御雷神可
遣乃貢進尒天鳥船神副建御
雷而遣是以此二神降到出雲
国伊那佐之小濱而拔十掬

25　小森千裕　三回生
創作　調和体　『冬の訪れ』　半紙

「霜にぬれ色づき枯れてたらたらと 落ちし一葉を山河にかざす」
今までは楷行草とひたすら漢字をやっていたので、新たな書体を習得したいと思い、大変未熟ながらも調和体に挑んでみました。今回は参考作品を模倣するかたちでまためたのですが、いつの日か自分の字体で自分の思うままに書けるようになれればと思います。


NO IMAGE

26　島津七明　四回生
創作　行書　『夢』　28cm×23cm

「夢」
いろんな想いを詰め込みました。


NO IMAGE

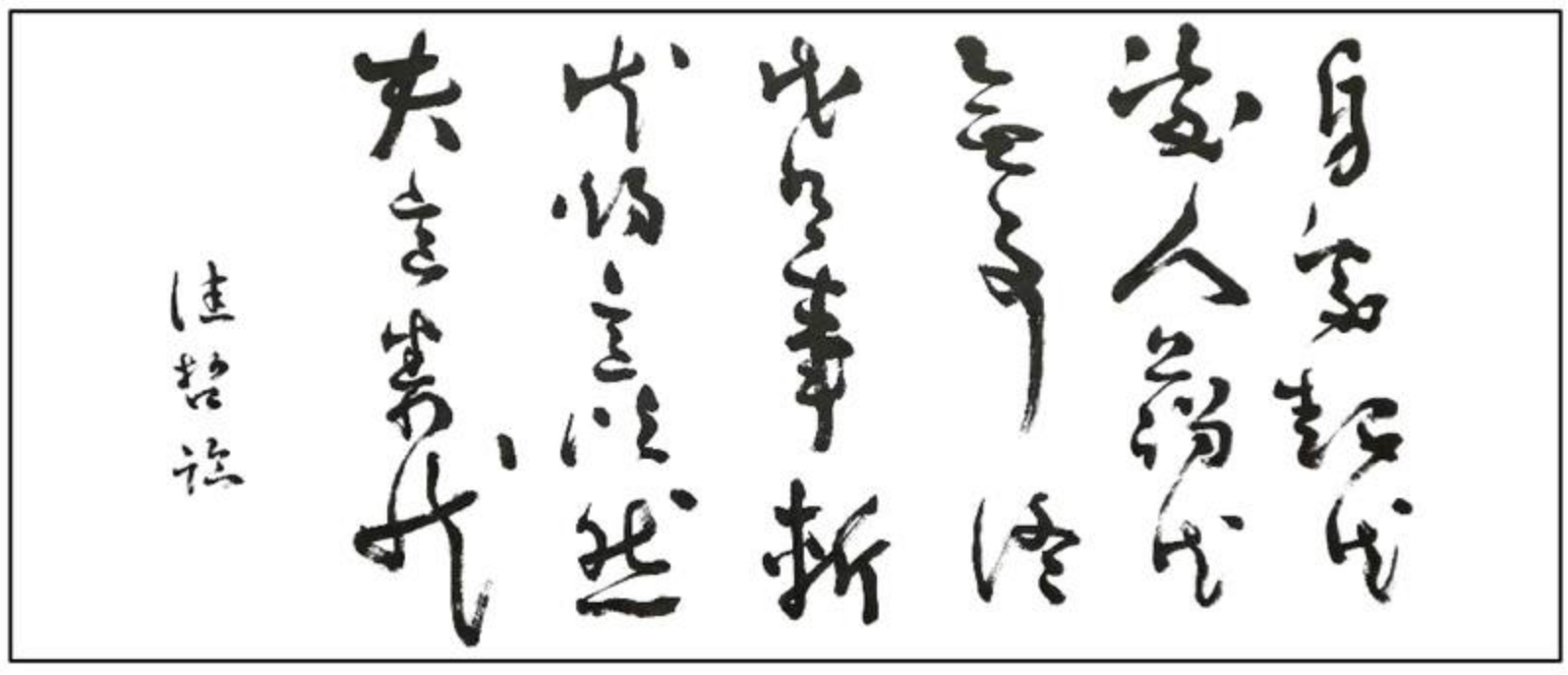
27

小山佳哲　四回生

臨書　草書　勝海舟『六然訓』　40cm×95cm

「自處超然　處人藹然　無事澄然　有事斬然　得意淡然　失意泰然」

今年の春に入部したもので、今回が最初で最後の個人出品になります。私の目指すところである六然訓を書きましたが、果たしてひとさまにお見せできる作品になったでしょうか……



28

篠原理那　四回生

創作　行書　『送友人』　全紙

「青山横北郭　白水遶東城　此地一為別　孤蓬万里征　浮雲遊子意　落日故人情　揮手自茲去　蕭蕭班馬鳴」

李白より「送友人」を創作しました。山水の美しい郊外にて友人を見送る際に書いた詩です。気づけばもう四年。この美しい地に別れを告げる時期になりました。よき思い出を胸に、友と別れを惜しみつつ旅立っていきたいものです。

NO IMAGE

29

下坂桃代　三回生

臨書　楷書　『一字蓮台法華経』　30cm×60cm

「妙法蓮華経如来力品第二十一……（略）」

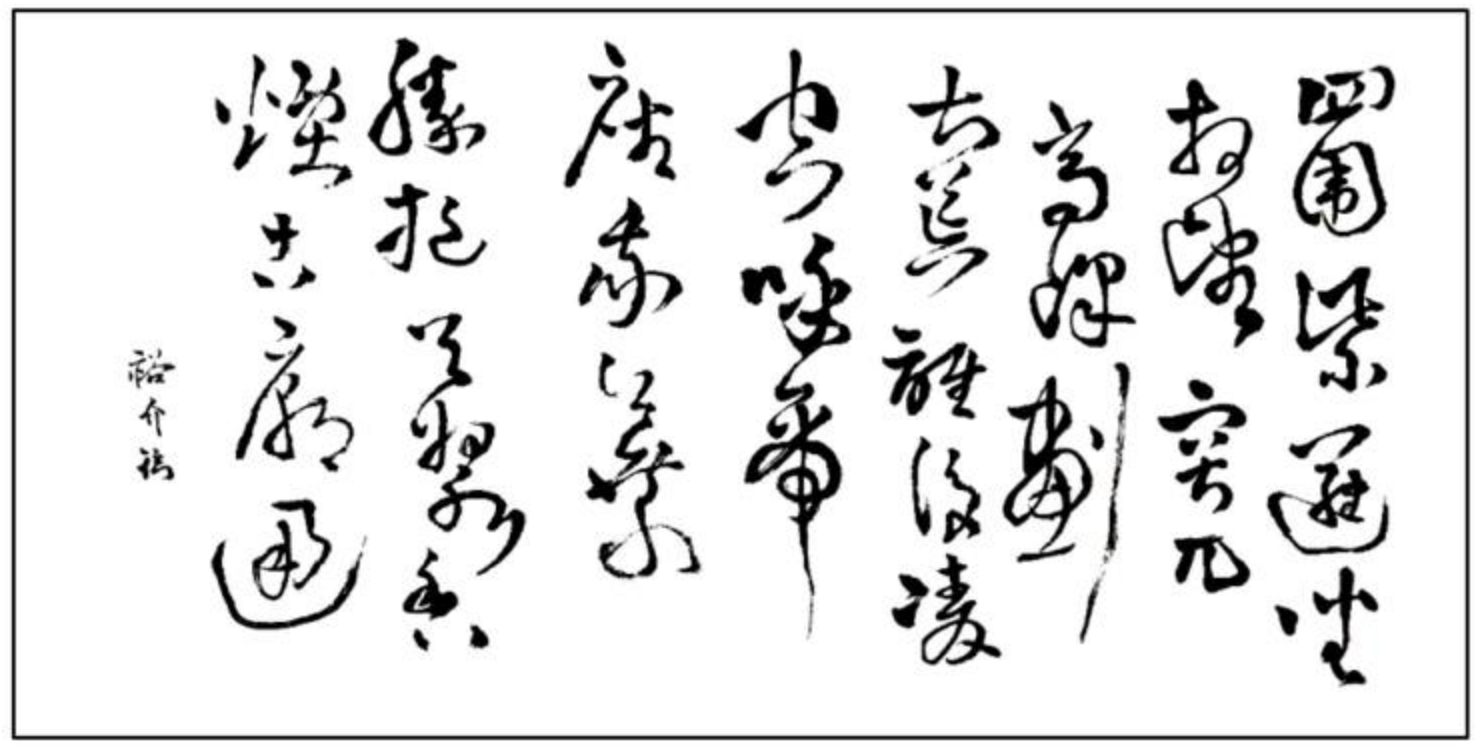
お経の文字の一字一字が仏様そのものであると考えて、仏や菩薩などと同じように、蓮華の台の上にお経の文字を乗せて書き写してあるところから、「一字蓮台法華経」と呼ばれています。一字一字、心を込めて丁寧に書きました。

NO IMAGE

30　角裕介　二回生
臨書　草書　王鐸『草書七律五首巻』　全紙横

「四圍紫邏坐相望突兀高峰劃大荒誰復凌空呼帝座我今乗勝挹天漿香煙古廟通」

一見、乱れたように書かれたように見えるけれども、均衡の整っていることに心が動かされました。少しでも王鐸らしさが作品に表れるよう取り組みましたが、いかがなものでしょうか。



31　宗哲仁　四回生
臨書　草書　張瑞図『獨坐敬亭山』　聯落

「獨坐敬亭山　衆鳥高飛盡　孤雲獨去閒　相看兩不厭　只有敬亭山」

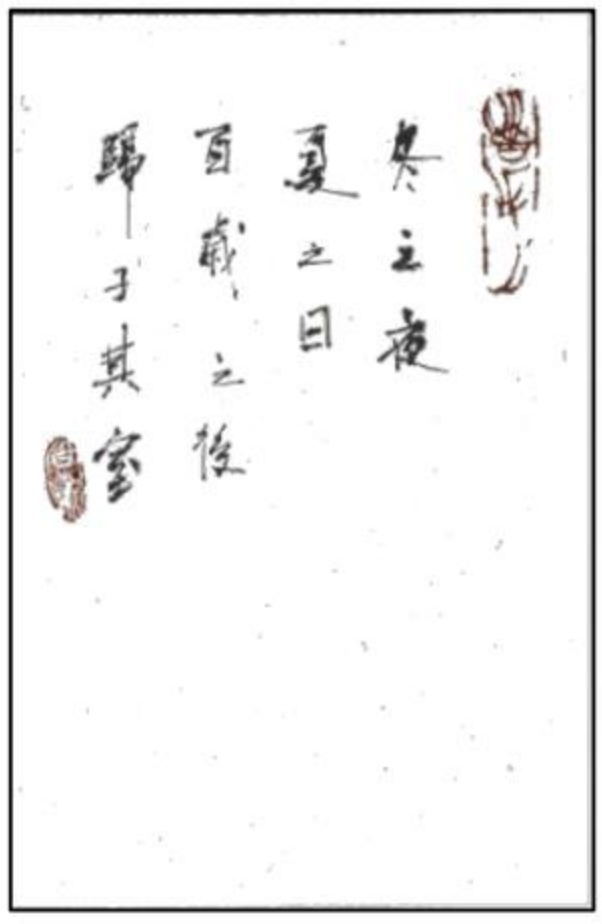
これは、「飛んでいた鳥も流れていた雲さえも去ってしまったが、敬亭山だけは見飽きない」という李白の詩です。学部四年目、節目の年になりましたが、いつまでたっても飽きのこない書道部です。だからこそ、別れの季節は切ないもの。そんな気持ちで書きました。もっとも、私自身は院生としてあと二年お世話になりますが…



32　石博昭　修士一回生
創作　行書　『葛生』　葉書

「冬之夜　夏之日　百歳之後　歸于其室」

題材を決めかねていた晩、偶々夢に見た漢詩を選んだ。『詩経』より『唐風・葛生』の一節、良人を悼む妻の歌である。筆を執るのは一年ぶりだが、こういうものは何枚も練習をすると却ってぎこちなくなると考え、一度のみの清書とした。素朴な詩意と調和すれば幸いである。



33　橘大輝　二回生
臨書　草書　王献之『中秋帖』　聯落

「中秋不復不得相還爲卽甚省如何然勝人何慶等大軍」
前回の書展も「中秋」から始まる法帖を臨書しました。秋って昼間は過ごしやすい季節ですが、昼夜の寒暖差で私たちの体調を脅かすところが、「ツンデレ」っぽくてチャーミングですよね。



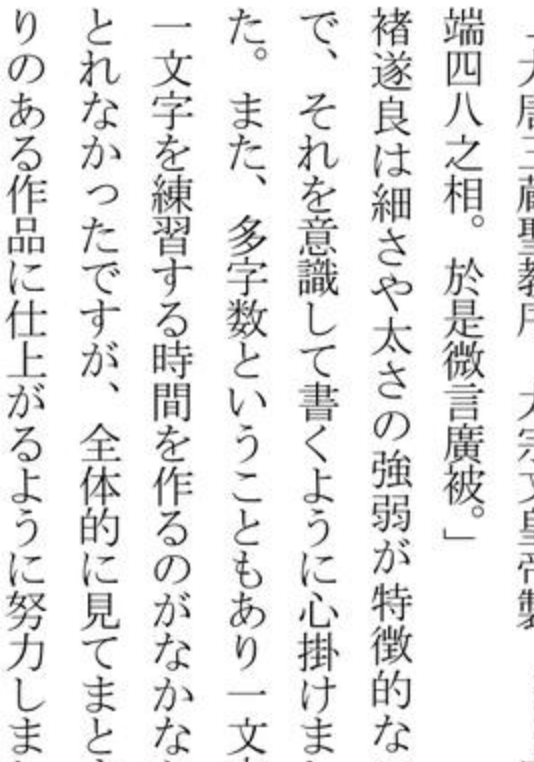
34　徳田寛生　二回生
臨書　仮名　藤原定信『糟色紙』　16cm×20cm

「ゆみいるところ　はるふかき山にいればやあづさゆみゆみ風にさへはなのちるらむ」
「四月神まつり　神のますもりのしたくさ風ふけばなびきてもみ（な）まつるころかな」
今回初めて仮名に挑戦しました。文字数は少ないですが、線質にはこだわりました。細い線をなめらかに書くのは本当に難しかったです。



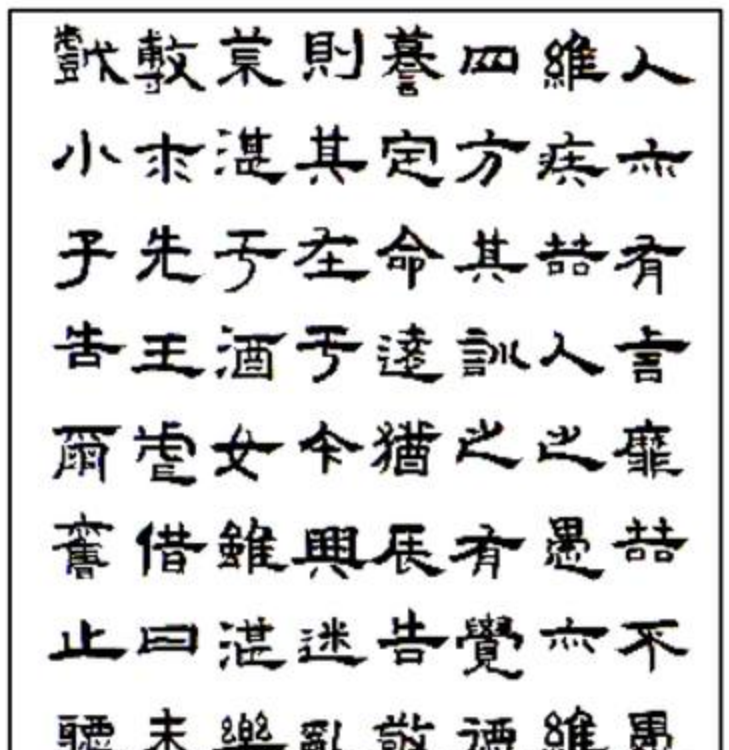
35　野田智子　一回生
臨書　楷書　褚遂良『雁塔聖教序』　半切

「大唐三蔵聖教序。太宗文皇帝製。……空端四八之相。於是微言廣被。」
褚遂良は細さや太さの強弱が特徴的なので、それを意識して書くように心掛けました。また、多字数ということもあり一文字一文字を練習する時間を作るのがなかなかとれなかったですが、全体的に見てまとまりのある作品に仕上がるように努力しました。



36　中村勇真　一回生
創作　隷書　鄧石如『詩経抑編』　全紙

「人亦有言。靡哲不愚。庶人之愚。亦職維疾。……亦聿既耄。於戲小子。告爾舊止。聽用我。」
初めての隷書作品です。手探りの状態から始めましたが、なんとか作品に仕上げることができました。鄧石如の作品はどれも非常に美しく、特にこの法帖は一点一画すみずみまで気が配られています。その真面目な雰囲気が出ているでしょうか。



37　平井達也　一回生
創作　篆書　『百龍図』　聯落

「龍龍龍……（略）」

龍は縁起の良い存在として親しまれており、守り神のような役割を担っている空想上の動物です。普段はかっこいいイメージがありますが、篆書で書いてみると意外とかわいいものです。みなさんに運気のお裾分けができますように……


龍龍龍

41

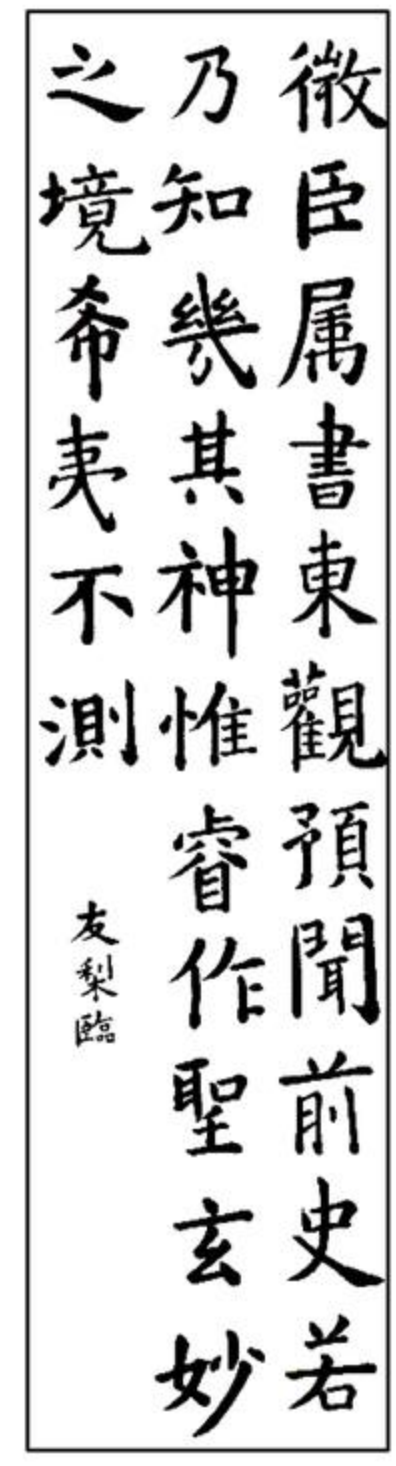
村上友梨　一回生

臨書　楷書　虞世南『孔子廟堂碑』　半切

「微臣属書東觀預聞前史若乃知幾其神惟睿作聖玄妙之境希夷不測」

初めての楷書作品で至らない点が多いですが、書道の基本を学ぶことができました。

孔子廟堂碑らしい線が出せるように努力しました。



42

家倉凌　修士一回生

創作　調和体　『文是瓦礫』　40cm×60cm

「文是糟粕。文是瓦礫。」

書の本体は何だろうかと最近よく考えています。考え過ぎて変な方向に行かないか心配です。



※写真は一部です

43

山口和樹　三回生

臨書　行書　趙之謙『行書七言聯』　半切　二連

「竹外飛花随晩吹　樹頭幽鳥試春声」

趙之謙の行書はあまり好みではないものが多いけど、これは法帖に一目惚れ。

「樹」がイケメン過ぎ。



44

吉村友希　四回生

臨書　楷書　鐘繇・王羲之・欧陽詢『魏晋唐小楷集』　半紙　三枚

「繇白昨還示知憂……／白騎遂内書不俟……／夫求古賢之意以大者遠者先之必迂廻……／観自在菩薩行深般若波羅密多時照……（略）」

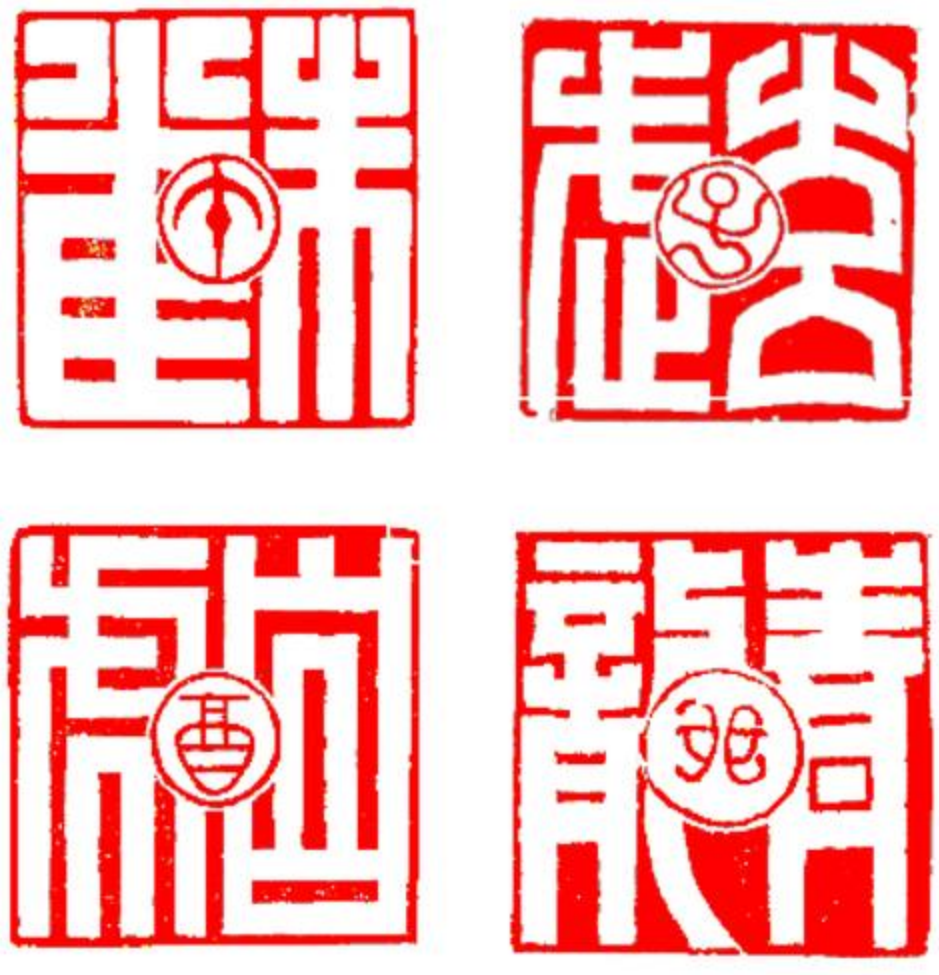
最後はやっぱり楷書を書きたい…時間的にも精神的にもぎりぎりの作品制作となってしまいましたが、書道部での四年間が詰まった作品になっていればと思います。

白騎遂内書不俟車駕計吳
人權道情懷急切當以時月

繇白昨踈還示知憂虞漫深遂積
疾苦何迺爾耶盖張樂於洞庭之野

夫求古賢之意宜以大者遠者先之必迂廻
而難通然後已焉可也令樂氏之趣或者其

觀自在菩薩行深般若波羅蜜多時照見
五蘊皆空度一切苦厄舍利子色不異空
空不異色色即是空空即是色受想行識



45

矢野凱己　三回生　・　小松聡子　修士一回生

木下有羽　三回生　・　橋詰都　二回生

創作　篆刻　『四神』　半切三分の二

「玄武（子）、青龍（卯）、朱雀（午）、白虎（酉）」

学年を越えて篆刻好きが集まりました。四神とは中国の神話に伝わる天の方角を司る霊獣です。北（子の刻）の玄武、東（卯の刻）の青龍、南（午の刻）の朱雀、西（酉の刻）の白虎を、白文に朱文を入れ込むという構成にして彫りました。会場にある作品はこれに小さな印を十二個加えて今までにない篆刻作品を作りました。

46

郡健一郎　二回生　・　山科直也　三回生　・　一二暉生　一回生

臨書　楷書・行書・草書　小野鵞堂『三體千字文』　半切　三連

「天地玄黄宇宙洪荒日月盈昃辰宿列張寒来暑往秋収冬蔵閏餘成歳律呂調陽雲」

自称京大書道部の最大野党（２０１６年８月設立）がまともに合作しました。ボケ二人とツッコミ一人です。


天地玄黄宇宙洪荒日月盈昃
辰宿列張寒来暑往秋収冬蔵
閏餘成歳律呂調陽雲　健一郎臨


天地玄黄宇宙洪荒日月盈昃
辰宿列張寒来暑往秋收冬藏
閏餘成歲律呂調陽雲　直也臨


天地玄黄宇宙洪荒日月盈昃
辰宿列張寒来暑往秋收冬藏
閏餘成歲律呂調陽雲　一暉生臨

47　理学部合作
創作　調和体　『理学部合作　―数式は理学の共通語―』　180cm×90cm
Thm.　世界という書物は数学の言葉で書かれている．Prf. Tribial.

48　二回生合作
創作　『二回生かるた』
二回生合作ではことわざ改変かるたを作りました。それぞれの絵札は読み札と同じ部員が描いておりますので、字やアイデアはもちろん、読み札と絵札のギャップも是非お楽しみください。

49　四回生合作
創作　『一期一会』　145cm×145cm
「勧君金屈巵　満酌不須辞　花発多風雨　人生足別離」
四度目の冬は、ちょっと切ない。
旅の終わりは想像以上に静かで、
それでいて確かにすぐ目の前にある。
だから、僕らはまた一堂に会する。
十人十色の書を通じて。
四度目の冬は、ちょっとあたたかい。

50　全体合作
創作　『書道部みくじ』
今回の全体合作ではおみくじを作りました。趣向を凝らした作品が盛りだくさんです。
運試しにおひとつよろしければ引いてみてください。

○禅居庵

51　阿部朱夏　二回生
創作　篆刻　『漢崔子玉座右銘』　半紙横

「無道人之短無說己之長　施人慎勿念受施慎勿忘……（略）」以前、鄧石如の書を全臨した漢詩を、今回は篆刻してみました。「人の短所を言わず、己の長所も言うな」という人のあるべき姿を説いたものではありますが、何回この詩を書いてもこの境地に達することはなかなか難しいです…



52　上井晴仁　四回生
臨書　行書　米芾『苕溪詩巻』　半切

「半歳依脩竹　三時看好花　懶傾恵泉酒。點」
米芾が友である林希に招かれて、現在の浙江省に赴く際に、友人たちに送った詩巻です。早いもので、私も四回生になりました。次の春には社会に出る同回生もいます。それでも、書道部の友人として時々は会って話したいものです。



53　上西隆太　四回生
創作　行草書　『過天門街』　聯落

「雪盡終南又欲春　遙憐翠色對紅塵　千車萬馬九衢上　廻首看山無一人」
白居易による詩で、雪解け後の人気のない山と、街の喧騒が対比されています。大学四年間で最も臨書した王鐸から集字しましたが、どれだけ自分の字として吸収できているでしょうか。



54　閻姝恒　四回生
創作　調和体　『旅立ちの日に』　B５横

「いま　別れのとき　飛び立とう　未来信じて
弾む若い力信じて　このひろい　このひろい　大空に」
あと数ヶ月で卒業式、書道部にいる四年間はあっという間に感じます。心に溢れる気持ちをまとめると、ありがとうとの一言になりました。これからみんなもそれぞれ旅立ってゆき、新しい物語のページが始まりますね！　今までありがとう、そしてこれからもよろしく！



55

小野日菜乃　二回生
臨書　草書　黄庭堅『李太白憶旧遊詩巻』　聯落

「迢々訪仙城卅六曲水迴栄一渓初入千花明萬壑度盡遺松聲銀鞍」
今回臨書したのは、李白が放浪中の元参軍との交友を懐かしんで詠んだ詩の一編。草書を最も好んだといわれる黄庭堅、後半生の書です。大胆な字の散らしと繊細な揺れを意識して書きました。



56

覚道直治　一回生
臨書　楷書　虞世南『孔子廟堂碑』　半切

「孝治要道於斯為大故能使地平天」
もう少しゆったりとした線を書きたかったのですが、なかなか上手くいかず自分の未熟さを感じました。もっと練習を積んでいけたらと思います。



57

片野裕太　修士一回生
臨書　行草書　王献之『衛軍帖』　半切

「殊未得盡消息理常以不寧僕射得散力」
力強く伸びのある線質と張り詰めた雰囲気を意識しました。原本からにじみ出る芯の強さは、作者である王献之が根っこの部分に持つ揺るがない自信の表れだと思いました。作品制作を通し、焦らず丁寧に取組むことがそれにつながるのかなと感じました。日々の取組みが大事だと再認識する今日この頃です。



58

金岡杏祐　一回生
臨書　行書　王羲之『蘭亭叙』　半切

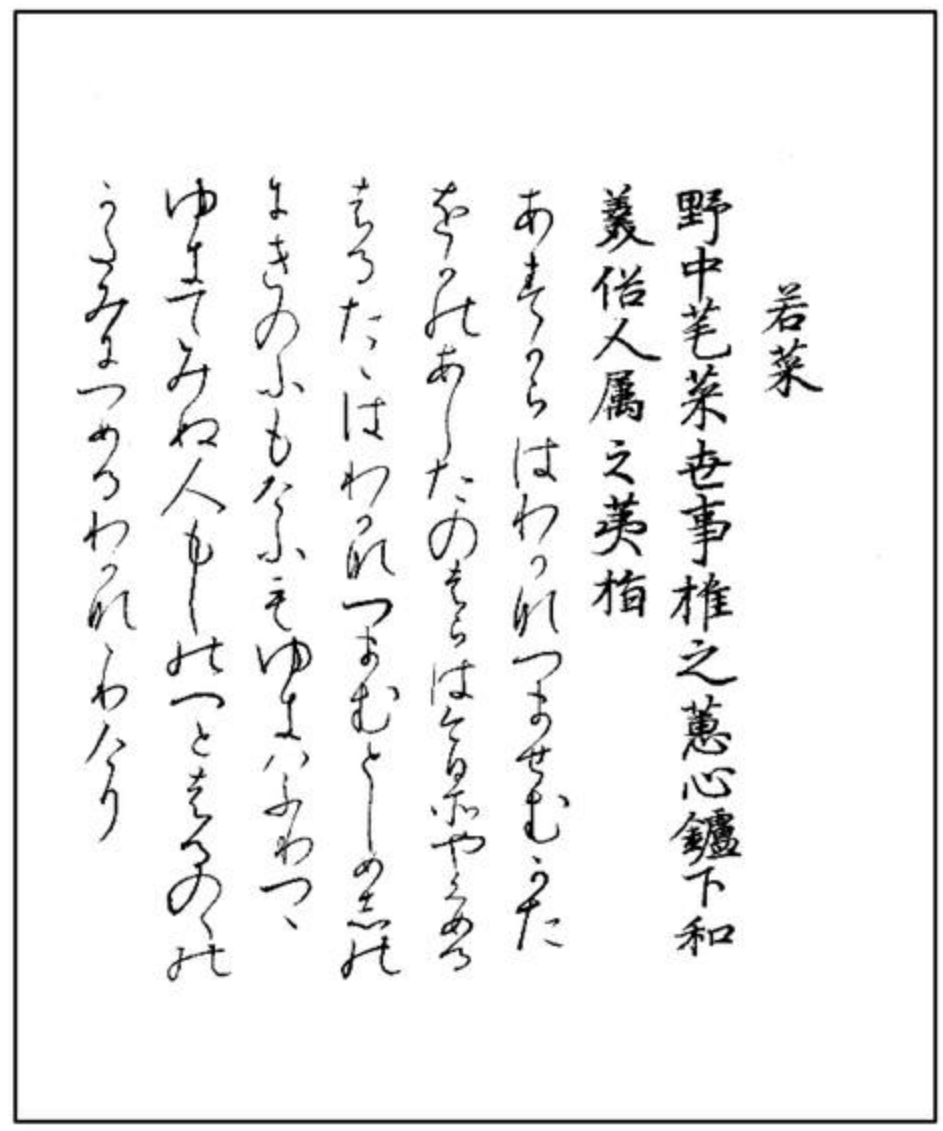
「是日也天朗氣清恵風和暢仰觀宇宙」
書聖王羲之の『蘭亭叙』を臨書しました。行書は初めてで、先輩のアドバイスを参考にして「日」の字を小さくして、「暢」の字を大きくして見せ場にしたり、筆を入れた勢いのまま続けて書くように意識したりしました。この作品で行書と楷書の違いを勉強しました。



59　木下有羽　三回生
臨書　仮名　伝藤原行成『粘葉本和漢朗詠集』　半切

「若菜　野中芼菜、世事推之蕙心。鑪下和羹、俗人属之荑指。
あすからはわかなつませんかたをかの　あしたのはらは今日ぞやくめる
はるたゝばわかなつまむとしめしのに　きのふもけふもゆきはふりつゝ
ゆきてみぬ人もしのべとはるのゝの　かたみにつめるわかなゝりけり」

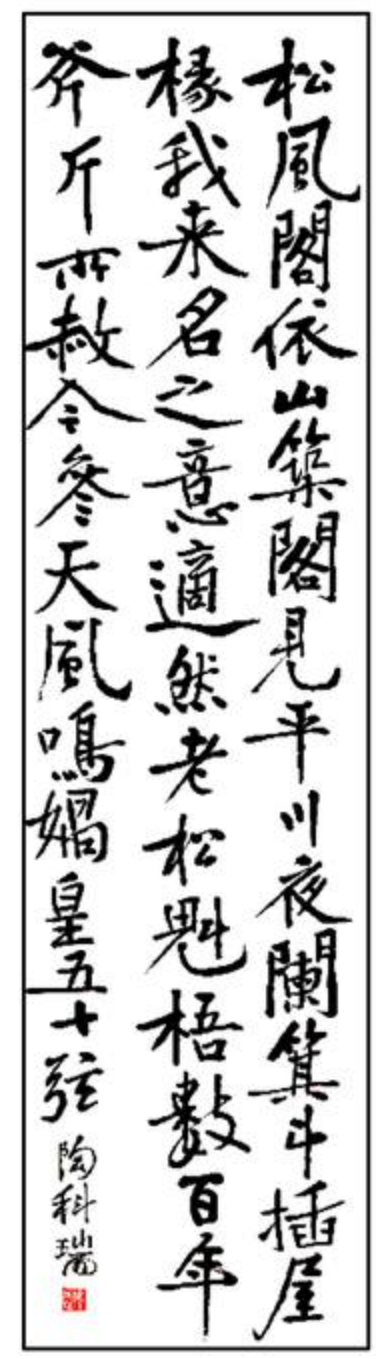
粘葉本和漢朗詠集には春夏秋冬の風物に関する漢詩と和歌が書かれており、四季からそれぞれ好きなものを選び臨書しました。（パンフレットには春のみ掲載）その整然とした並び・癖のない字の美しさを表現したかったのですが、なかなかに難しかったです。もっと精進します。


若菜
野中芼菜世事推之蕙心鑪下和
羹俗人属之荑指
あすからはわかなつませんかた
をかのあしたのはらは今日ぞ
やくめるはるたゝばわかなつ
まむとしめしのにきのふもけ
ふもゆきはふりつゝゆきて
みぬ人もしのべとはるのゝの
かたみにつめるわかなゝりけり

60　クロッカー・コリー　三回生
臨書　行書　黄庭堅『松風閣詩巻』　半切

「松風閣　依山築閣見平川　夜闌箕斗挿屋縁　我来名之意適然　老松魁梧数百年
斧斤所赦今參天　風鳴媧皇五十弦」

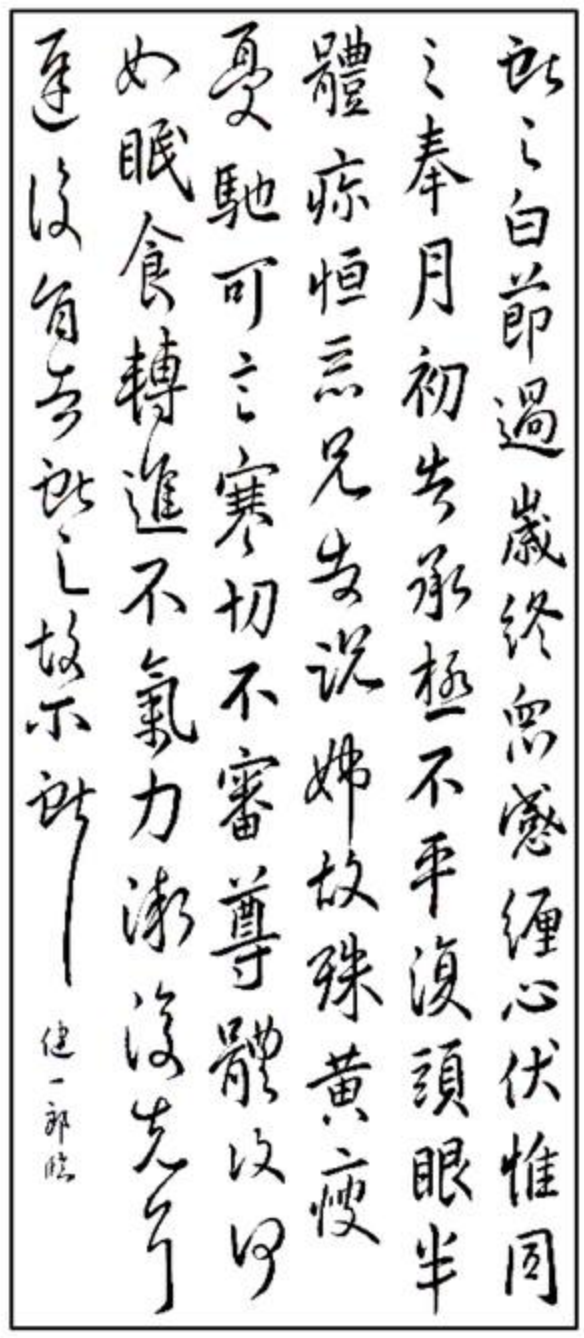
これは僕の初めての作品です。数年前日本語の勉強を始めてから、書道に惹かれました。まだまだ改善の余地がありますが、書くことを楽しみに、この作品を完成させました。どうぞ品評ください。


松風閣依山築閣見平川夜闌箕斗挿屋
椽我来名之意適然　老松魁梧數百年
斧斤所赦今參天風鳴媧皇五十弦
陶科瑞

61　郡健一郎　二回生
臨書　行草書　王献之『節過歳終帖』　全紙

「献之白節過歳終衆感纏心伏惟同之奉月初告承極不平復頭眼半體……（略）」

ただ大きな紙に書いてみたいというだけの軽い気持ちでこの作品を書いてみましたが、構成から非常に悩みました。特に後半の連綿は、初めての挑戦ということもあり、苦戦を強いられました。未熟な作品ですが、御批評よろしくお願いします。

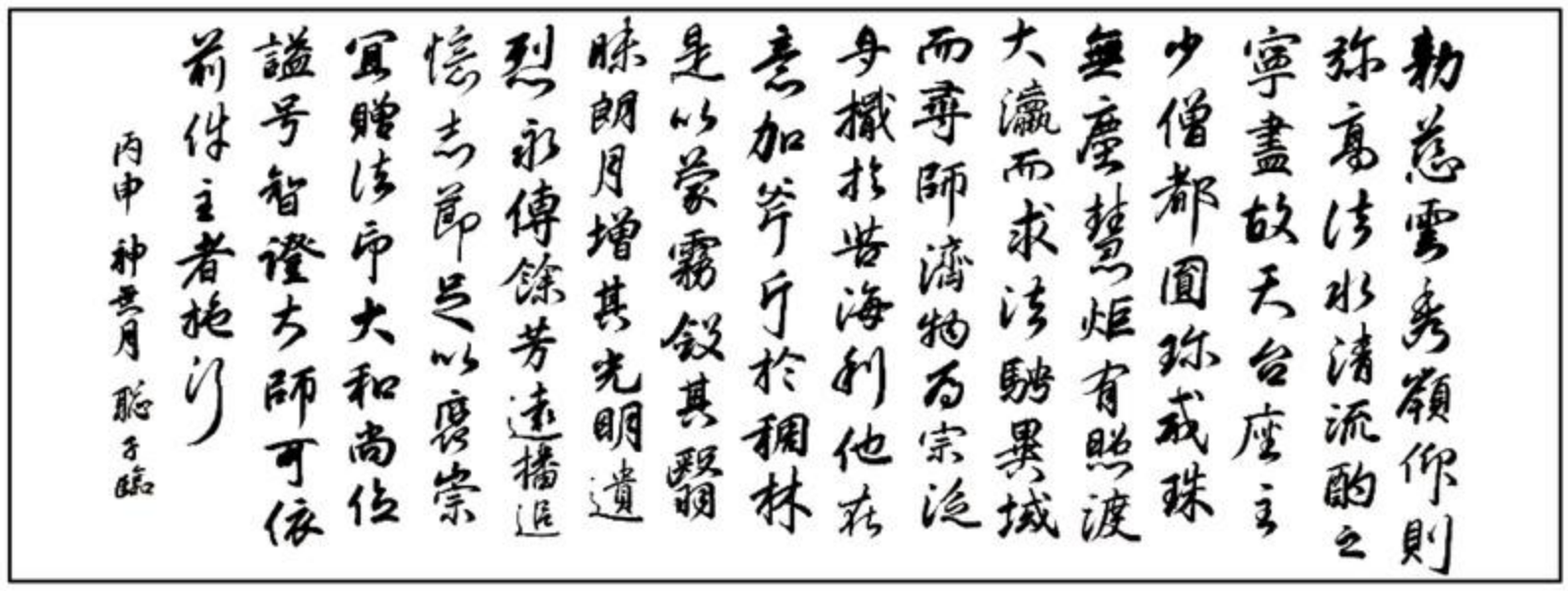

献之白節過歳終衆感纏心伏惟同
之奉月初告承極不平復頭眼半
體疹恒苦兄告說姊故殊黄疫
憂馳可之寒切不審尊體汝母
如眠食轉進不氣力漸復先
遣沒旬乎馳示馳
健一郎臨

62

小松聡子　修士二回生
臨書　行書　小野道風『智証大師諡号勅書』　54cm×140cm

「勅慈雲秀嶺仰則……（略）」

私が出品する十二回目の、そして最後の書展となりました。「和様の書」展の図録をめくって、ビビッときた作品を（ほぼ）全臨しています。悔いを残さないように、一字一画に心を込めて書きました。

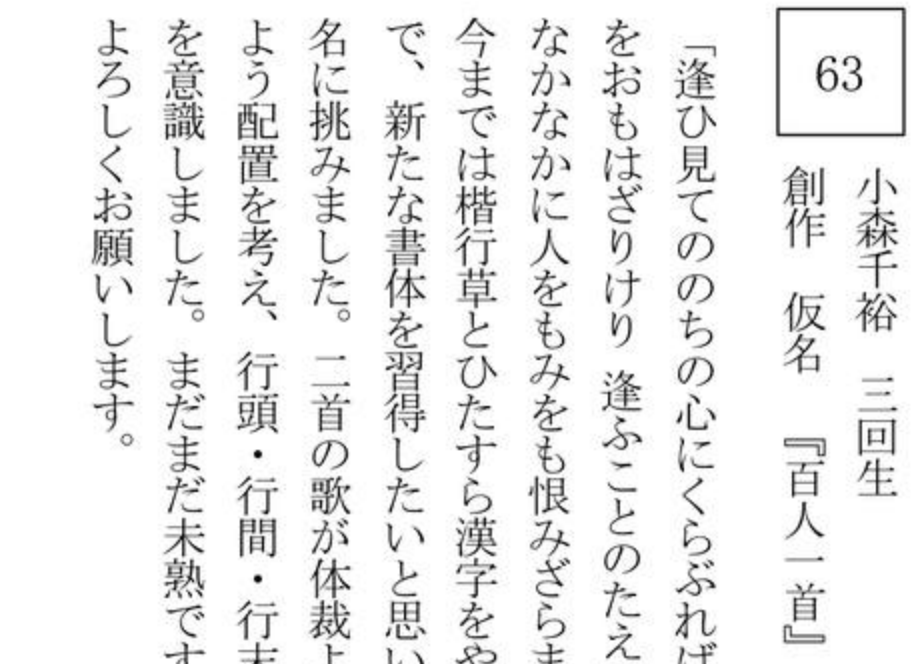


63

小森千裕　三回生
創作　仮名　『百人一首』　半紙

「逢ひ見てののちの心にくらぶればむかしは物をおもはざりけり 逢ふことのたえてしなくばなかなかに人をもみをも恨みざらまし」

今までは楷行草とひたすら漢字をやっていたので、新たな書体を習得したいと思い、初めて仮名に挑みました。二首の歌が体裁よくまとまるよう配置を考え、行頭・行間・行末とメリハリを意識しました。まだまだ未熟ですが、ご批評よろしくお願いします。

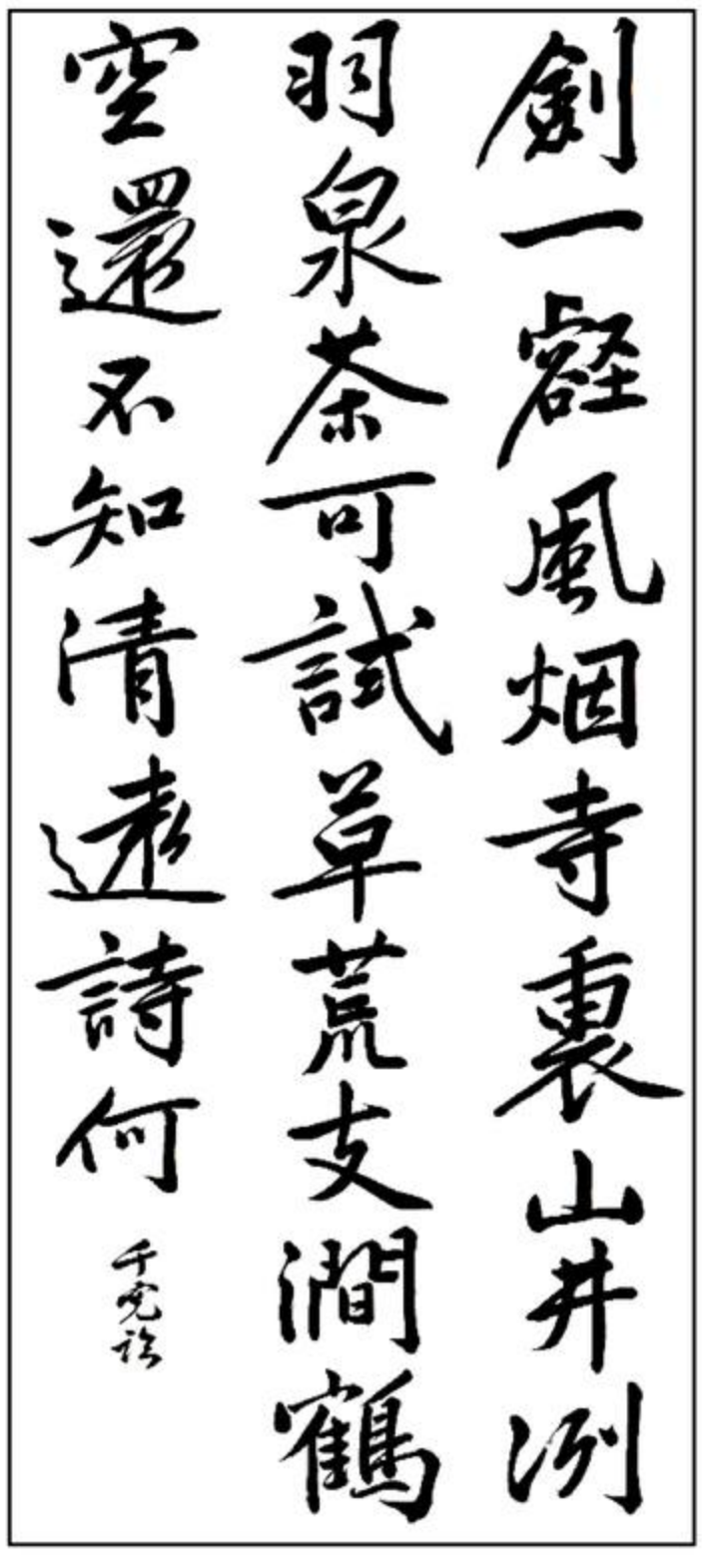


64

佐武千寛　二回生
臨書　行書　文徴明『行書詩巻』　聯落

「劍一壑風烟寺裏山井冽羽泉茶可試草荒支澗鶴空還不知清遠詩何」

以前から憧れを抱いていた文徴明の行書を今回初めて臨書してみました。文徴明の良さを表現する言葉は人によって様々ですが、私は初めて見たとき何よりもまず純粋に美しいと感じました。その美しさを少しでも表現できていればいいのですが。



65

佐山侑莉　一回生
臨書　行書　呉昌碩『元遺山七言行書對聯』　半切　二連

「集元遺山句　庚申十月杪　客海上禪甓軒　天驚地怪見落華　巷語街談總入詩　七十七叟　呉昌碩」
初めて二聯作品に挑戦しました。二つで一つの作品であることを意識し、一体感のあるものを目指しました。また、一つ一つの字にこだわって臨書しました。





66

島津七明　四回生
創作　英字　『夢を叶える秘訣』　A４

「Curiosity Confidence Courage Constancy」
夢を叶える秘訣は四つのCに要約される。それはCuriosity（好奇心）、Confidence（自信）、Courage（勇気）、そしてConstancy（継続）である。
というウォルト・デイズニーの言葉です。

NO IMAGE

67

清水麻友美　三回生
臨書　行書　何紹基『行草山谷題跋語四屏』　半切

「賛曰能因濯古銅瓢満酌飲之曰飲此則」
何紹基の独特な書風を再現するのは難しかったですが、得るものも多く楽しんで書けました。



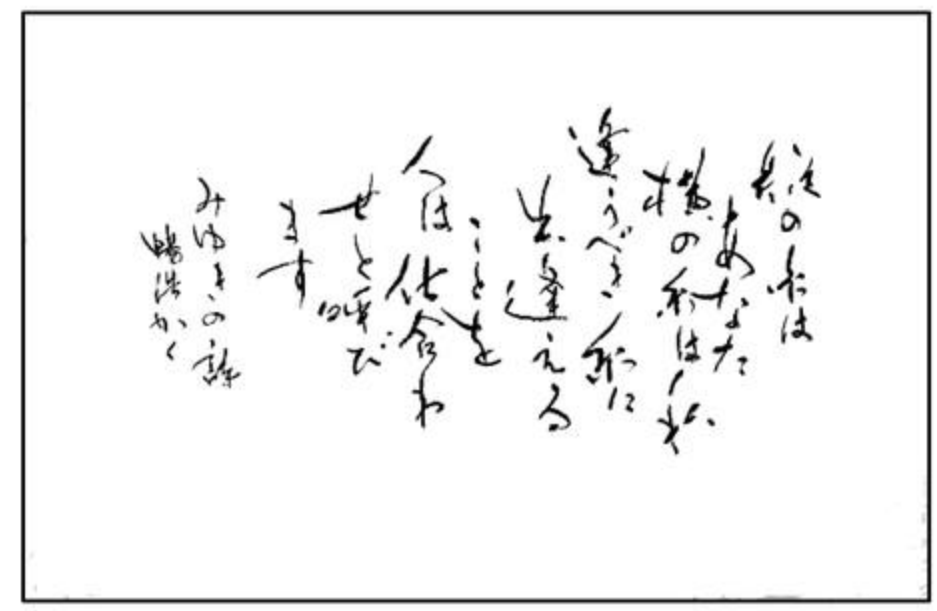
68

白谷暢浩　四回生

創作　調和体　『糸』　全紙三分の一

「縦の糸はあなた横の糸は私逢うべき糸に出逢えることを人は仕合わせと呼びます」

白と黒。疎と密。そこにある美を追い求めて。



69

仲村康太郎　二回生

臨書　草書　張瑞圖『飲中八仙歌』　巻子

「(恨不移封向酒)泉。左相日興費萬錢。飲如長鯨吸百川。銜盃樂聖稱避賢。蘇晉長齋繡佛前。醉中往々愛逃禪。宗之瀟洒美少(年。)」

飲中八仙歌は、唐代の八人の酒客を詠った杜甫の詩。有名な詩であるが、しかしなぜか、瑞圖の法帖の内容はもとの詩文と一部異なっている。筆は鼬毛のを使い、弾力を活かして瑞圖独特の字形・リズムを味わった。

70

建部壮一郎　一回生

臨書　隷書　作者不詳『曹全碑』　半切　二連

「君諱全。字景完。敦煌效穀人也。其先蓋周之胄。武王秉乾之機。翦伐殷商。」

NF書展を除くと初めての出品です。整然とした字形や波磔の美しさに魅了され、夏休みより作品制作に取り組んでおります。他に所属するサークルとの兼ね合いでなか なか書道に時間が取れない中、必死に書き上げました。まだまだ未熟ではありますが、御指導のほどよろしくお願いいたします。



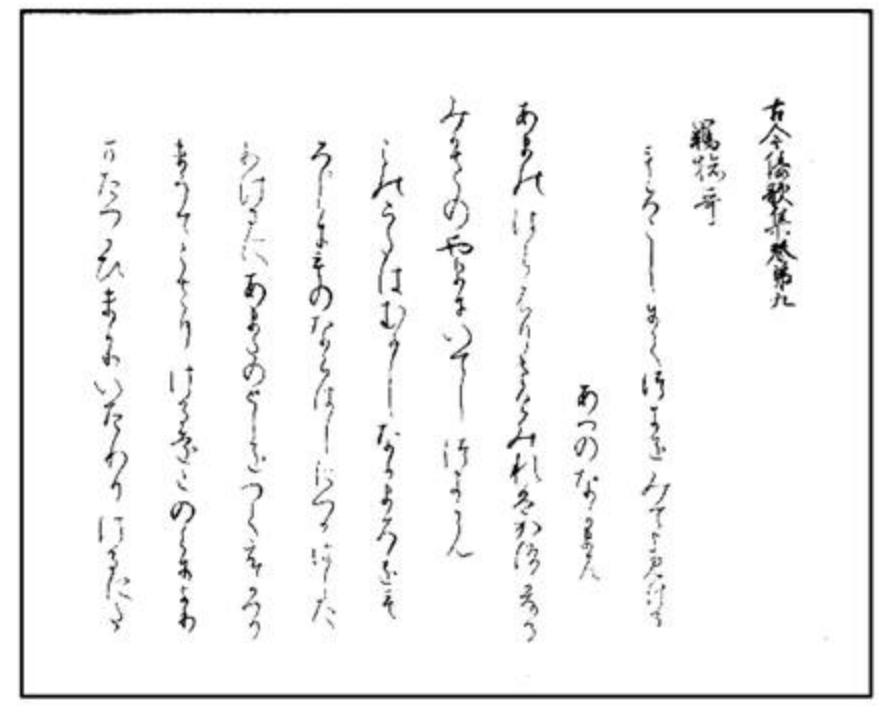
71

中村直樹　二回生

臨書　かな　伝紀貫之『高野切第一種』　巻子

「古今和歌集巻第九羈旅哥　も（毛）ろこしに（尓）て（弖）つ（徒）き（支）をみてよみ（見）ける　あべのなか（可）まろ（呂）……（略）」

かな作品の出品は三回目になります。やはりかなはいいですね。春合宿から練習している箇所ですが、上達は見られるでしょうか？



72

橋詰都　二回生

臨書　篆書　鄧石如『朱韓山座右編』　聯落

「萬緑陰中。小亭避暑。八闥洞開。几簟皆緑。雨過蟬聲。風來華氣。令人自醉。」

単調に見える一字一字でも、よく見ると実は強弱に富んでいます。そんな文字の中の変化を付けることを目標に臨書しました。



73

挟間優美　一回生

臨書　行書　王羲之『集字聖教序』　半切

「譬夫桂生高嶺雲露方得泫其花」

初めて行書に挑戦しました。夏の間は楷書を書いていたこと、そして明らかな練習不足のために、筆遣いのぎこちなさが未だに抜けません。行書との戦いはもうしばらく続きそうです。



74

原誠人　二回生

創作　行草書　『壺中天』　半切二分の一

「壺中天」

壺の中には、楼閣と美酒佳肴の並ぶ別天地が広がっている――『後漢書』の伝奇譚に材を取った語で、単に「別天地」、或いは「酒を飲んで俗世間を忘れる楽しみ」（大辞泉）を意味します。師に学ぶ「翠軒流」を意識した作品を京大の書展でお目にかけるのはこれが初。私のイズムと矜持にかけて、稽古不足に言い訳は致しません……

NO IMAGE

75

原田拓実　二回生

創作　かな　『百人一首』　全紙

「花の色は移りに(尓)け(希)りな(奈)いた(多)づらに(二)わが(可)み(三)よに(尓)ふ(布)る(流)な(奈)が(可)め(免)せしま(万)に（一部抜粋)」

久しぶりにかなの細字を書きました。色とりどりの料紙を配置する作品を制作してみたいと以前から考えていたので、この機会に百人一首を題材として挑戦してみました。ぜひ書展で完成形をご覧になって下さい。



76

前山隼人　二回生

創作　甲骨文　『雲從龍風從虎』

「雲從龍風從虎」

「雲從龍風從虎」は「易経」に出てくる言葉です。龍が現れると雲が湧き虎が現れると風が吹く、転じて同類の者が感応し集まり共に行動するようになるという意味です。書道が好きという共通項で集まったこの書道部で、より一層「自分の書道」というものを追求していきたいと思います。ご批評の程、宜しくお願い致します。

NO IMAGE

77

二二暉生　一回生

臨書　隷書　作者不詳『史晨後碑』　全紙

「令還所斂錢材。史君念。孔瀆顏母井。去市遼遠。百姓酤買。不能得香酒美肉。於昌平亭下。立會」

落ち着いた隷書をやってみようと思い、この碑を臨書しました。いざ書いてみると字にはっきりした特徴がなく、雰囲気を出すことに苦労しましたが、隷書の筆法を改めて練習する良い機会になりました。



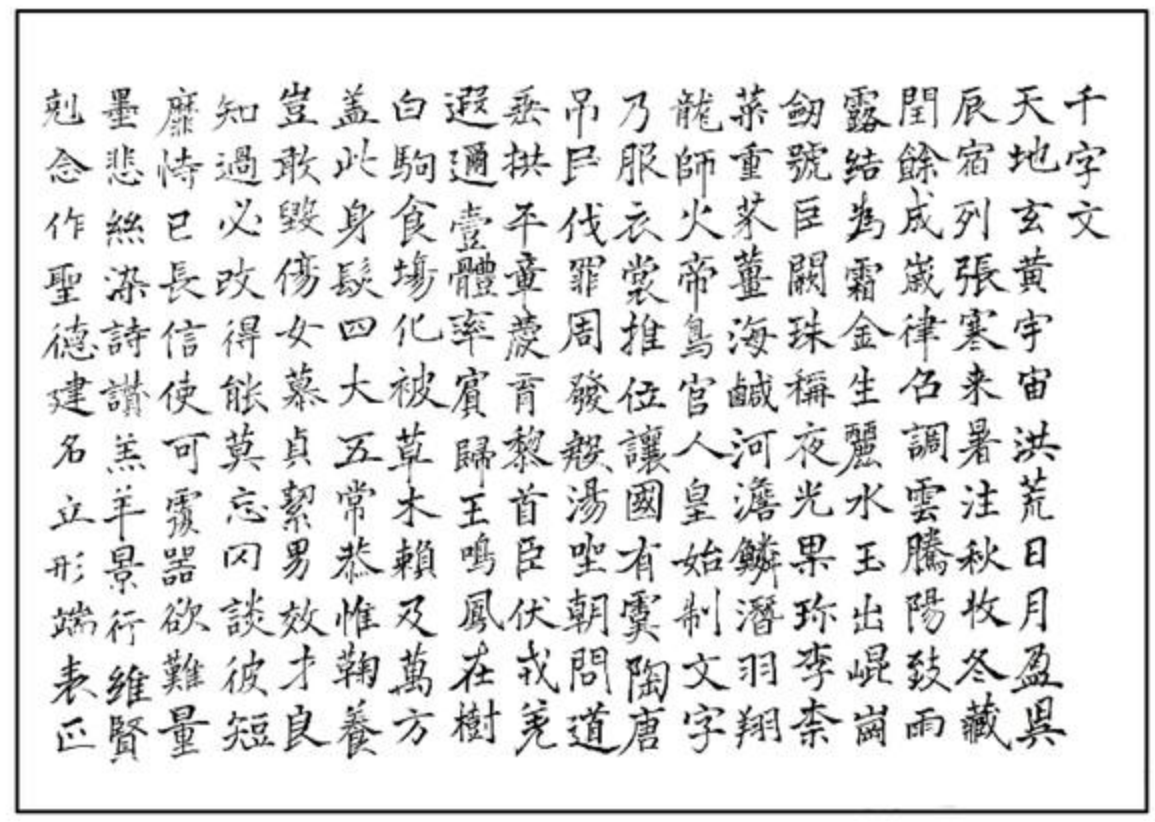
78

堀場菜摘　三回生

臨書　楷書　褚遂良『楷書千字文』　巻子

「千字文天地玄黄宇宙洪荒……（略）」

キャパシティーを越えた作品を選んでしまう己の愚かさが身に沁みます。



79

宮部大志　三回生

臨書　楷書　顔真卿『多宝塔碑』　半切

「熊羆之兆誕彌厥月炳然殊相岐嶷絶於葷茹髫齔不爲童遊道樹萌牙聳豫章之楨」

書道をすると、膝が痛かったです。



80

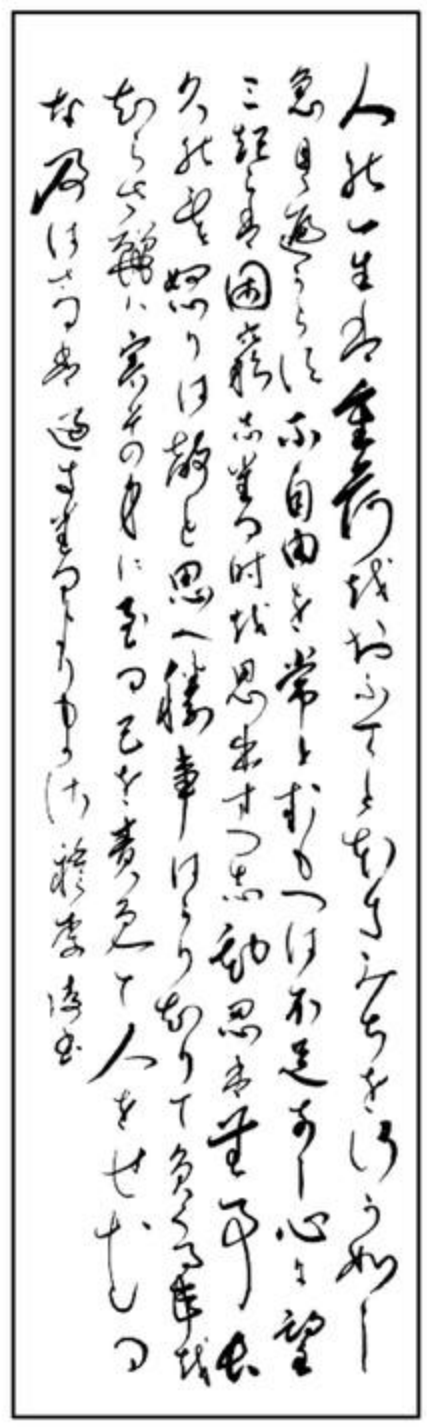
家倉凌　修士一回生

創作　漢字仮名交じり

『人の一生は重荷を負うて遠き道を行くが如し』　半切

「ひと能（の）一生盤（は）重荷越（を）おふてと本（ほ）支（き）みちを行可（が）如し。急具（ぐ）遍（べ）可（か）ら須（ず）。……（以下略）」

様々な仮名で書いてみた中から気に入ったものを選びました。変体仮名であふれた明治以前のひらがなの世界は、現代よりもはるかに豊かに広がっていただろうと想像します。



81

矢野凱己　三回生
創作　調和体　『美しき天然』　半切三分の一　二連

「空にさえずる鳥の声　峰より落つる滝の音」
久しぶりの調和体。行間や字の大きさ、墨の潤滑など様々な部分で変化を出して雰囲気ある作品を目指しました。





82

山口和樹　三回生
臨書　篆書　趙之謙『急就篇』　全紙

「進近公卿傳仆勳前後常侍諸將軍列侯邑有土臣封積學所致非鬼神」
今期は週六日休日の私もこの作品には苦しめられました。



83

山崎夏野　三回生
臨書　行書　李邕『李思訓碑』　半切

「道子伯考因家焉泊孫漢前將軍廣子侍中」
ついに「フォント（書体）」にはまりました。この知識や熱意を書道に生かしたいものです。



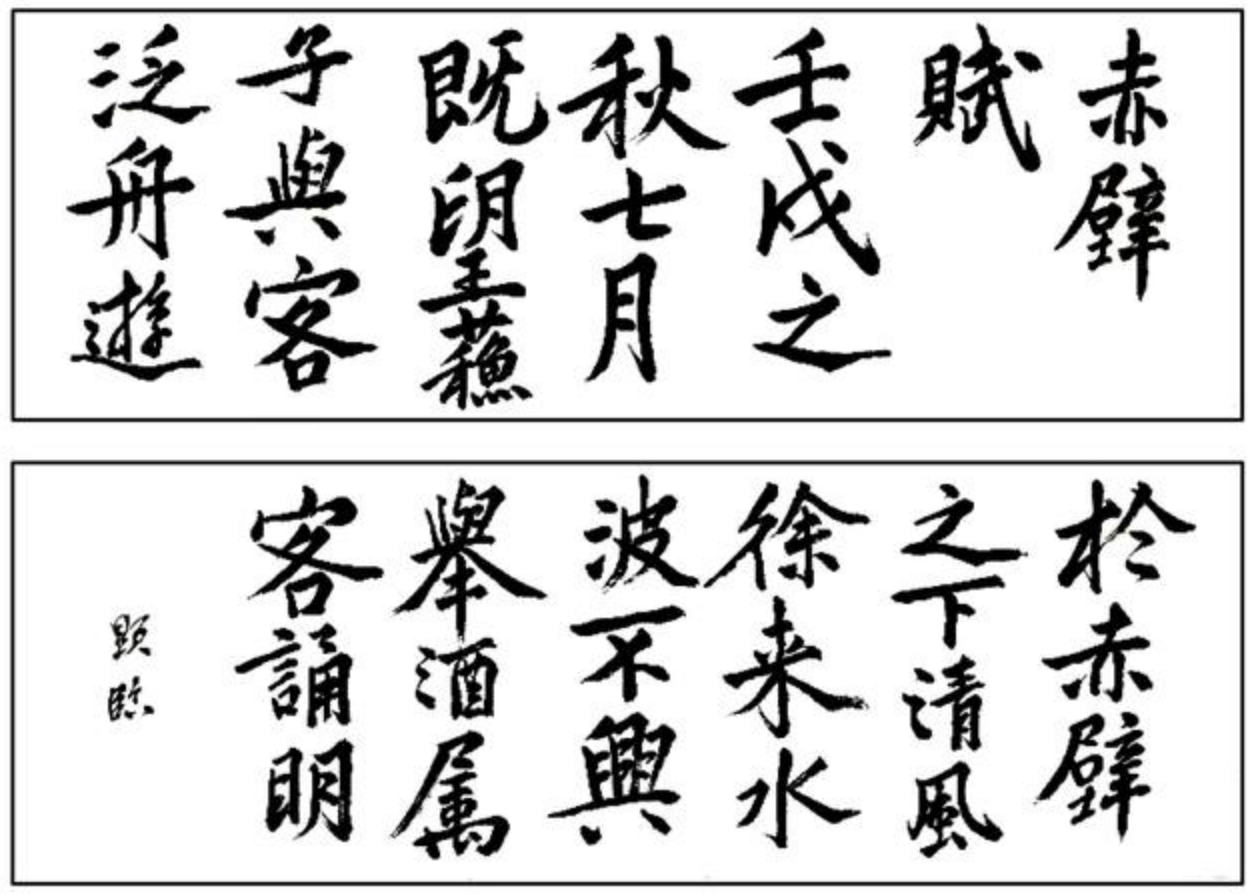
84

渡辺顕　三回生

臨書　行書　作者不詳『前赤壁賦』　半切横四分の三　二連

「赤壁賦壬戌之秋七月既望蘇子與客泛舟遊於赤壁之下清風徐來水波不興擧酒屬客誦明」

様々な書家の赤壁賦を見ましたが、これが一番お気に入りでした。夏休みは草書に初めて取り組み、草書ばかり書いていましたが、結局行書作品を出すことになりました。横作品は初めてで、横の間隔の取り方に苦戦しました。



85

吉岡智志　一回生

臨書　楷書　褚遂良『孟法師碑』　半切

「明纂歴道冠犧農崇三清以緯民懐九仙」

今回も楷書をやりたいと思い、褚遂良の孟法師碑を選びました。お手本のような整った字を書くのは難しいですね。



86

金山優作　一回生　・　前山隼人　二回生

創作　かな・篆書　『冬の凛然』　全紙

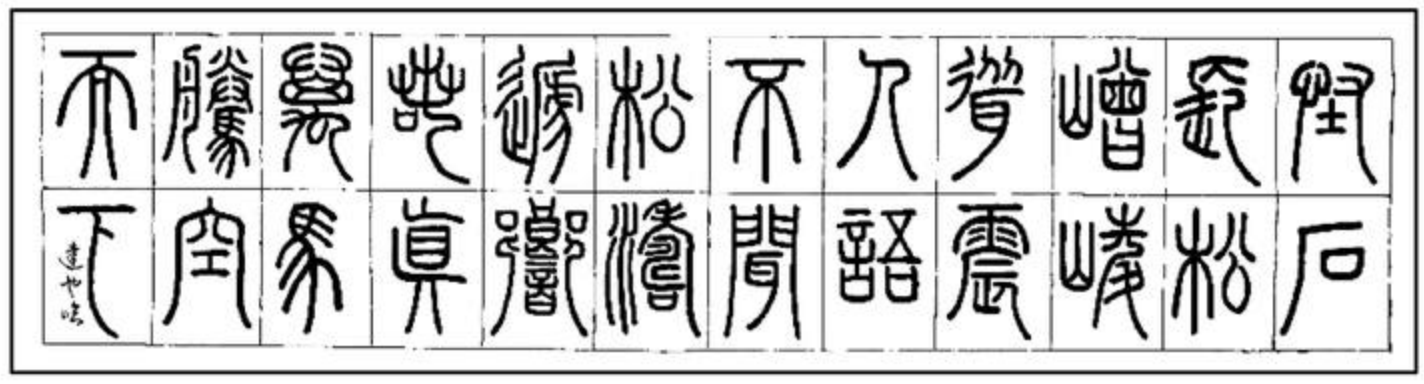
「墻角数枝梅凌寒独自開遥知不是雪為有暗香来／かんつばきこきくれなゐの花にさきふゆ木のにはのひとみのごとき」

冬の漢詩と和歌を各々篆書と仮名で書いてみました。漢詩は王安石の「梅花」という作品で、冬の厳しい寒さの中でも梅が咲いているのが香りで分かることを詠んだ詩です。和歌の方は窪田空穂の作品で、冬木の庭に凛と咲く寒椿の紅の色を詠んだ歌です。篆書と仮名という異色の組み合わせがうまく調和できていれば幸いです。



平井達也　一回生　・　中村勇真　一回生　・　勝野初紀　一回生

臨書　篆書・楷書・草書・隷書　鄧石如『正草篆隷墨寶册　四體帖』　半切横　四連









「怪石長松嶒峻聳震人語不聞松濤颼響若眞萬馬騰空而下」

「雪齋清境發於夢想此間但有荒山大川脩竹古木每飲郵酒……（略）」

「擇故山濱水地環籬値荊棘間栽以竹餘丈植芙蓉三百六十……（略）」

「少學琴書偶愛閑靜開巻有得便欣然忘食見樹木交蔭時鳥……（略）」

僕みたいに手足が長くてスタイルがいい子たちが大集合しました。（平井）

二回生の先輩の上手さには頭が上がりませんが、リーダーは私です。（中村）

一回生が眩しくて直視できません。切実に若さが欲しいです。（橘）

タイムマシンがあれば鄧石如に会いに行きます。どなたか中国語教えてください。（勝野）

【部員紹介】

顧問：京都大学大学院　人間・環境学研究科　阿辻　哲次
技術顧問：日展会友　書道家　寺本　蒼玄

一回生

経済　イムヒョンジュン
工　大田滉貴
工　覚道直治
京学　勝野初紀
法　金岡杏祐
工　金山優作
工　邢書禹
医　佐山侑莉
文　朱俊銘
法　建部壮一郎
農　張馨元
経済　辻均

理　中村勇真
医　野田智子
文　挾間優美
医　東原佳子
工　一二暉生
文　平井達也
法　村上友梨
農　吉岡智志

二回生

工　阿部朱夏
医　今村朱里
法　上村香鈴
医　浦川真由子
法　小野日菜乃
教育　神﨑七海
工　木上博之
工　郡健一郎
農　小林由佳
法　米田景
工　近藤泰仁
農　阪井田有紗
文　佐武千寛
農　杉本舞
工　角裕介
文　橘大輝
法　徳田寛生
文　仲村康太郎
文　中村直樹
工　橋詰都
理　原誠人
工　原田拓実
同志社　平野晶子
法　前山隼人
農　松尾和輝

三回生

造形　大池ららる
医　岡本晴香
工　奥田祐司
経済　笠原知生
法　川口功
府医　木高早紀
農　木下有羽
経済　クロッカー・コリー
医　小森千裕
法　清水麻友美
医　下坂桃代
薬　竹内春佳
理　多田愛花マリー
工　津金澤秀行
総人　深谷拓未
農　堀場菜摘
造形　眞嶋優一
法　三村祐貴子
工　宮部大志
工　矢野凱己
工　山口和樹
農　山崎夏野
工　山科直也
工　渡辺顕

四回生

農　新井一矢
薬　荒巻拓哉
理　上西隆太
工　牛山泰喜
工　上井晴仁
工　閻姝恒
工　角谷遊野
農　釜阪紘平
工　藏岡凌平
経済　小山佳哲
文　篠原理那
光華　島津七明
工　白谷暢浩
工　宗哲仁
理　武田桃子
法　徳川鈴奈
理　疋田研一郎
法　山﨑絢香
総人　山脇謙
文　吉村友希

六回生

総人　平野泰隆

修士一回生

法　大石龍太
農　片野裕太
工　河合翼
経済　柯潔
阪大　小島健史
情報　シュタール・ゾフィア
工　石博昭
農　中谷百花
情報　藤田雄也
農　家倉凌

修士二回生

理　伊東優治
文　王薈媛
法　大泉陽輔
医　川上澄香
工　小松聡子
情報　鈴木貴也
人環　陳巧香
農　寺西幸
工　藤井結稀
工　山本大翔
薬　渡辺健介

博士課程修了

地環　藤井基弘

掛軸 文房四宝 和紙の店 書楽

〒605-0012 京都市東山区東山三条東入南側
TEL.075-762-2330／FAX.075-751-6571
syoraku@aioros.ocn.ne.jp
〈日曜・祝日定休〉

Calligraphic Item Specialty Store 書遊 検索
篆刻用品・書道用品・額・軸装はお任せください。
書遊
http://www.syoyu-e.com/
AM.10:00－PM.6:00

奈良本店 駐車場完備
奈良市今辻子町37
TEL0742-23-5547
FAX0742-20-2261

大阪店 駐車場あり
大阪市福島区福島5-14-6クレセントビル2F
TEL06-6458-8808
FAX06-6456-4077

京都店
京都市中京区高倉通三条下る丸屋町164
TEL075-251-7800
FAX075-251-7802

新潟営業所
TEL 025-374-5510
FAX 025-374-5511

札幌アメミヤ 絵画店
札幌市中央区南一条西2丁目5南一条ビル5F
TEL011-398-9400
FAX011-398-9401

筆・墨・硯・書画用紙・色紙短冊・日本画用具
株式会社 松楳園
〒600-8075 京都市下京区柳馬場通仏光寺下ル
TEL（075）351－6380(代)
FAX（075）361－8006
http://www.shoubaien.co.jp.

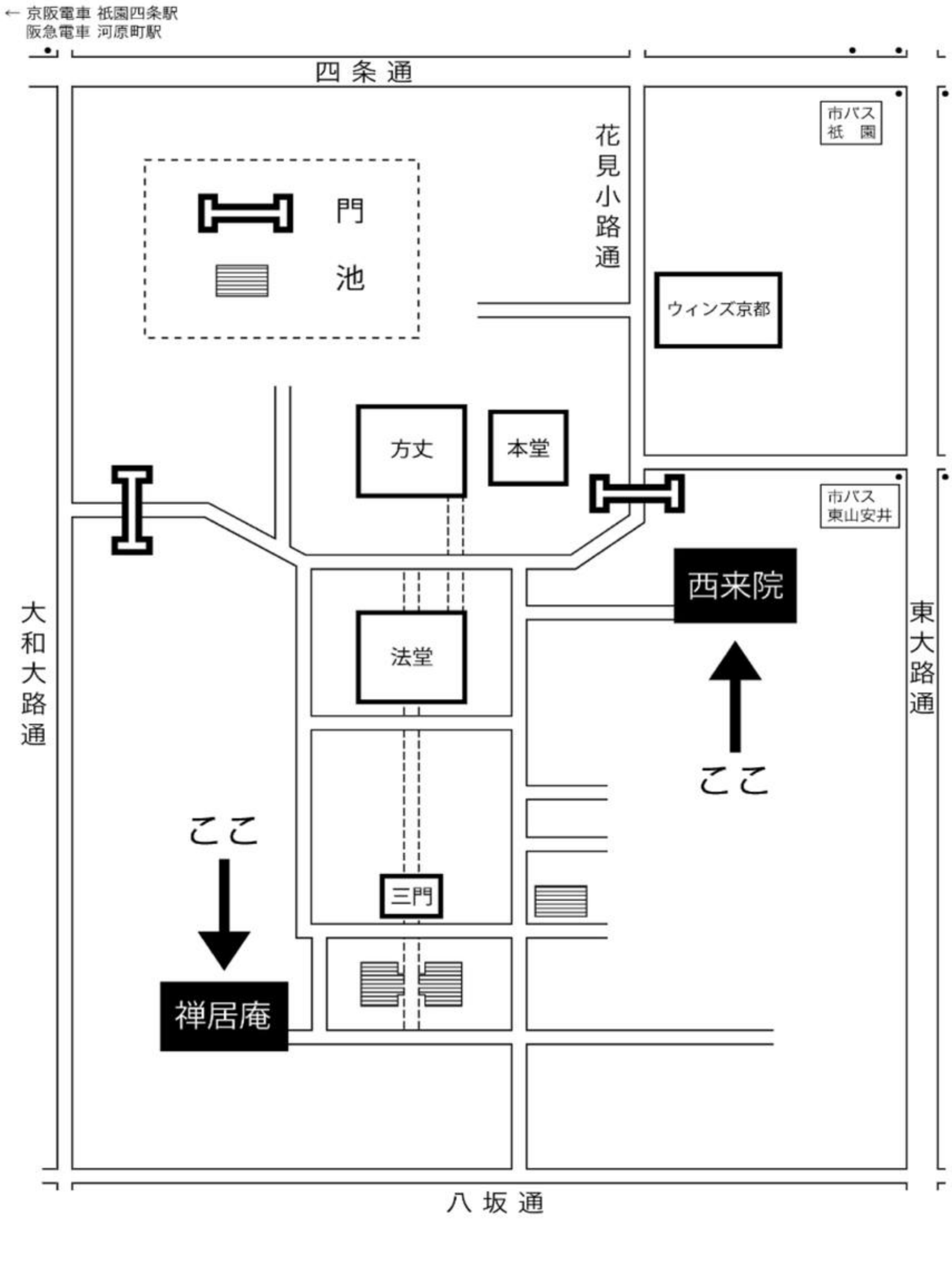
香/筆/和風文具/香道具/茶道具
鳩居堂
〒604-8091 京都市中京区寺町姉小路上ル下本能寺前町520
営業時間 10～18時 定休日(日曜日)
TEL. 075(231)0510 FAX. 075(221)5987
地下鉄東西線市役所前駅下車5番出口
http://www.kyukyodo.co.jp

京筆・京文房
龍虫堂
京都 〒604-0916 京都市中京区寺町通二条上ル
TEL.075-252-4120 FAX.075-252-0006
東京 〒102-0072 東京都千代田区飯田橋四丁目六の二
東洋美術印刷本社ビル一階
TEL.03-3239-0733 FAX.03-3239-0731

文具四寶（筆・墨・硯・紙）和紙工芸品 書画作品
書芸サロン 賛交
二条店 〒604-0931 京都市中京区二条通河原町西入北側
TEL・FAX：075-222-0390
E-mail：info@shoga-sankou.co.jp
URL：http://www.shoga-sankou.co.jp
株式会社 賛交社 本社 〒607-8216 京都市山科区勧修寺東出町27
TEL：075-572-8964／FAX：075-572-8905

かな料紙・京染和紙
加工紙・画仙紙・半紙他
書道用和紙の専門店
紙の津久間
京都市下京区新町通花屋町下ル
TEL（075）371－8186（代）
FAX（075）371－8189

—建仁寺案内図・周辺地図—



ご来場ありがとうございました。

京都大学書道部



This book was
made by the LeME